

北海道立美術館・芸術館紀要 | 第33号 |

Hokkaido Art Museum Studies No.33

2024



北海道立近代美術館
北海道立旭川美術館
北海道立函館美術館
北海道立帯広美術館
北海道立釧路芸術館
北海道立三岸好太郎美術館

北海道立美術館・芸術館紀要 | 第33号 |

Hokkaido Art Museum Studies No.33

2024

北海道立近代美術館
北海道立旭川美術館
北海道立函館美術館
北海道立帯広美術館
北海道立釧路芸術館
北海道立三岸好太郎美術館

目次 CONTENTS

●調査報告

- 3 戦時下における岩船修三の制作活動(1939-45)について 田村 允英
Notes on Shuzo IWAFUNE's Works and Activities during the Wartime 1939-1945 Masahide TAMURA

●資料紹介

- 19 フランク・シャーマンへのインタビュー③:1991年2月4日 II 佐藤由美加
Interview with Frank Edward SHERMAN③: February 4, 1991 II Yumika SATO

1. はじめに

「北海道の美術・戦時下の動向について 1938-45」¹執筆以降、戦時下(1938-45)における北海道美術界の動向を示す作品・資料の多くは、道内外の美術館・博物館や作家遺族の下に残されていることがわかってきた。制作された作品はもちろん、小川原脩や国松登、高橋北修、田辺三重松、能勢眞美など実際に戦地に従軍した画家による膨大なスケッチや手記、写真、戦後の新聞記事、回想録などの資料が見つまっている。

前述した美術家たちはいずれも戦後の北海道美術界を牽引した画家であるが、このたび筆者が注目したのは終戦後間もない1945年12月に結成された公募展「全道美術協会(全道展)」で中心的な役割を果たした函館出身の油彩画家・岩船修三(1908-89)である。岩船は1936年から5年間を予定していたフランス滞在を、欧州での戦争激化のあおりを受けて4年で切り上げ、1939年12月4日に帰国した。1941年には第28回光風会展で会員に推挙され、同年中に旭川第七師団報道部に応召。1943年には少尉待遇で報道部に正式配属となる。

岩船修三の戦前の制作活動については、大熊敏之による論文「岩船の絵画1920-30's」に詳述されている²。しかし、当該論文では函館商業学校(現・北海道函館商業高等学校)時代からフランス滞在期までの画業および画風の変遷は詳細に検討されているものの、帰国後の戦時下における制作活動については出展展覧会および出品作の記載や、簡単な史的事実の記述にとどまっている。

一連の調査の過程で、岩船修三旧蔵のスケッチ帖や新聞記事スクラップ、アルバムなどが遺族より市立函館博物館に寄贈されていること、「撃ちてしまむ北海道聖戦美術展」や「大東亜戦争陸軍美術展」に出品された《山崎部隊アツ島玉砕決意》³(1944年、函館護国神社蔵、図11~18)が岩船本人の意思により函館護国神社に寄贈されたことが判明した。

本稿では、これまで触れられることの少なかった岩船修三の戦時下における制作活動(1939-45)⁴について未公開の作品や資料により紹介する。

2. 旭川第七師団応召まで 1939-41

函館商業学校在学中から、同校の美術部「^{ヨーロッパ}極光画会」で絵画に親しんだ岩船は、卒業後の1928年に上京。川端画学校を経て、函館でも活動した画家・佐野忠吉の紹介で帝展審査員の青山熊治に師事した。1930年の第11回帝展で初入選し、1936年4月の第23回光風会展ではF氏奨励賞を受賞。同年12月に念願の渡仏を果たした。

渡仏期における岩船の画業の詳細は前述の大熊論文に詳しいため割愛するが、このとき岡本太郎や高田力蔵といった若手の日本人画家たちと交友し、ピカソやマティス、藤田嗣治などエコール・ド・パリを代表する画家たちとも出会っている。特にピカソとの出会いは強烈だったようで「僕にとってピカソに會えたのがパリー生活中唯一の収穫でした」と帰国後の取材で語っている⁵。

予定していたフランス滞在は、第二次世界大戦激化のために切り上げられ、岩船は1939年9月25日にボルドー発ロンドン、ロサンゼルス経由の邦人引揚船・鹿島丸に乗り、同年12月4日横浜港に帰港した。同乗者の中には宮本三郎や前出の高田ほか、岡田毅や海老名文雄など、在仏歴20年前後のベテラン画家や音楽家、舞台芸術家もおり、さながら芸術家たちの避難船という雰囲気であったようだ⁶。同月10日には銀座アウルで美術座談会が赤光社と新樹社の共催で開かれるなど、道内外の美術関係者がフランスで研鑽を積んだ岩船の制作活動に深い関心を寄せていたことがわかる⁷。

帰国後の岩船は活動拠点を東京に定め、東京市王子区(現・東京都北区)に居を構えた。翌1940年いっぱいには滞欧時代の作品を整理し、ヨーロッパでのスケッチにもとづく制作を行ったという。こうして1941年の第28回光風会展には《フランス小町一隅》(1937年、北海道立近代美術館蔵)など戦前期に模索した粗いマチエールを踏襲した写実的な風景画3点を出品。出品作を見た画家・今井繁三郎からは「ナイーブな中に繊細な情感の包まれている画調」⁸と高く評価され、同年に光風会会員に推挙された。

岩船は公募展での活躍の傍ら、美術家たちの職域奉公にも参加している⁹。正確な日付は未調査だが、東京麹町国民学校図画教室で開かれた陸軍美術協会主催の早朝の

1 佐藤幸宏、田村允英、沼田絵美(共著)「北海道の美術・戦時下の動向について 1938-45」『北海道立美術館・芸術館紀要』第31号、北海道立近代美術館他、2022年。
2 大熊敏之「岩船の絵画 1920-30's」『紀要1990』、北海道立近代美術館他、1990年。帰国以前の岩船の経歴に関する記述はおおむね当該論文に準拠。
3 作品名は作品内の書き込みを根拠としたため、当時の新聞記事や展覧会出品目録のタイトル表記とは異なる。
4 本稿における戦時下は、岩船修三の帰朝から終戦まで(1939年12月~1945年8月)を指す。
5 「戦争に消極的なロンドン青年 鹿島丸で歸った兩氏の土産話」『新聞紙

名不詳』、1939年12月上旬? *。
*は「岩船修三旧蔵新聞記事スクラップ」(市立函館博物館蔵)に所収。
6 「パリーの邦人を満載 さながら藝術船 鹿島丸けふ横濱へ 避難第四船」『東京朝日新聞』、1939年12月5日。和田博文「日本人美術家のパリ 1878-1942」平凡社、2023年、371頁。
7 「岩船氏歸朝歓迎座談会」『新聞紙名不詳』、1939年12月上旬? *。なお、同会では岩船が8ミリ映写機で撮影したヨーロッパ風物の映像も上映された。会費は1円50銭。
8 「次代に生くる洋畫家群(二)」『美之國』第17巻第4号、1941年4月。
9 「畫帖に納む 戦場の姿 彩管寒襖古始る」『新聞名不詳』、日付不詳*

スケッチ会(俗称・寒稽古)に参加している。当日は陸軍から現役兵が派遣され、戦闘訓練の実演等が行われたらしい。藤田嗣治、宮本三郎、鶴田吾郎、中村研一など洋画家、日本画家、彫刻家あわせて40名以上が参加した同会の様子は、「食事も握飯に澤庵という野戦食で済まし朝十時から午後三時半まで熱心に畫帖にをさめた」¹⁰と報道されている。フランス遊学時代に知遇を得た藤田や、共に帰朝した宮本らの間に挟まり写生している姿から、当時の交友関係が偲ばれる(図1)。また、参加者の多くは陸軍美術協会関係者であり、こうした人間関係が縁となり、1943年に岩船が旭川第七師団報道部付の尉官に推された可能性はゼロとは言えない。軍部からの要請により作成されたと思われる1943年付の自筆履歴書の写し(図2、ここでの署名は本名の修吉)も残されているのでこちらも参照されたい。

1941年11月、岩船は一時函館に戻り、五十嵐孝子と見合い結婚¹¹。同年12月8日に日本軍は宣戦布告前にハワイ真珠湾に奇襲攻撃をしかけ、太平洋戦争が勃発する。この頃から岩船は『旅道づれ』と題したスケッチ帖を記している(図S-1)。当時の岩船が置かれた状況を追うためにも、簡単にその内容に触れたい。

3. 『旅道づれ』に見る戦時下の岩船家 1941-43

市立函館博物館に寄贈されたスケッチ帖『旅道づれ』(別タイトル:修三スケッチ日記)は、寸法12.0×8.6cmの紙片80点余が綴られた小ぶりの帳面である。制作年代については、1941年12月15日から1943年1月3日までの日付を確認することができ、まさに戦時下の画家の日常を描き出した資料と言えよう。個人の日記であること、正式に軍属となる前だったことから、日常のニュースをアレンジしながら切り取って描写している。内容は大まかに以下の3項目に分類できる(各スケッチの詳細については「資料:『旅道づれ』(別タイトル:修三スケッチ日記)リスト」を参照されたい)。

A. 太平洋戦争の戦況(図S-2, 4~5, 7~9, 11~15, 21)

日本軍のシンガポール進軍やセレベス(現スラウェシ)島への落下傘部隊上陸など、当時の日本軍の戦況を伝えるニュースなどを元にスケッチしたようだ。また、第三次ソロモン海戦を見守るルーズベルト米大統領や、英国政府に抵抗する眉間にシワを寄せたガンジーの表情などを風刺画的で軽妙なタッチにより表現している。師団付となる以前の自由な身であったからこそ描けた私的なスケッチ帖という性格上、こうしたコミカルな人物描写が展開されていると考えられ、表現者・岩船修三の新たな一面も見えてきた。

B. 銃後(図S-3, 6, 10, 19, 23~25)

戦地から遠く離れた故郷で過ごす人々の姿を捉えた、いわゆる銃後の風景も描かれている。防空演習や軍人と共に大掃除に参加する姿から、戦時下の庶民の様子が伝わってくる。さらに、当時の日本は金属物資の供給が不足していた。1942年11月24日、金属回収令が発令され、鍋などの日用品はもちろん由緒ある古い寺社の釣り鐘以外のあらゆる金属が軍部に徴収された。スケッチでは、国のために応召され、銃を片手に意気揚々と出征する兵士の姿に擬人化された鐘が描き出されている。

さらに、戦時下の緊迫した場面が描かれる一方、妻の手料理を楽しんだり、親族と酒を酌み交わしたり、浅草まで初詣に出かける様子など、平時と変わらない岩船家の日常も確認できる。

C. 岩船の制作活動(図S-16~18, 20, 22)

当時の岩船の制作活動を記したのものも見られる。1942年4月25、26、27日の3日間、銀座の日動画廊で企画「滞欧帰朝作品展」が開催された。告知用の招待状1200枚を用意し開催に向けて準備を進めたり、作品を搬入したりする様子を描いたもの、函館近郊の観光地・大沼で制作に励む姿を描いたもの、次回の公募展に出品予定の作品は自信作であるから不安より自信が勝っていると自身の心境を面白おかしく描いたものなど。加えて、岩船も結成に参加した旧・麓棠社¹²のメンバーが集まり、同年12月10日に再組織したことが記されるなど、この期間の岩船の活動を追うためにも重要な資料であることは論をまたない。

こうしたスケッチ帖の記述・描写には戦時下を過ごした岩船の等身大の姿が投影されており、自由な制作も展開できていた当時の状況を窺うことができる。

4. 旭川第七師団と岩船 1941-45

岩船は1943年8月、召集令状により旭川第七師団に応召し、陸軍省からの指令により師団内の報道部に配属となり、少尉に任官される。その当時の偽らざる気持ちを戦後、次のように回想している。

僕はこの喧嘩には負けられぬと思った。それは欧米の生活を見ているので日本の生活が、いかにも低く、負けたならもっとみじめな姿となると考えたからである。画家としての僕の立場で報道の役職を有効に利用することを考えた¹³

フランスで生活してきた岩船だからこそ、日本と西洋

10 同上。

11 渡辺まり氏(岩船修三長女)のご教示による(2023年10月27日確認、以下同様)。

12 麓棠社は1932年、岩船修三、南政善、永田精二、高橋道雄、鈴木栄二郎、米田嘉一により結成される。この他、脇田和や佐野志吉などがいた。詳細は以下

の文献参照。古道谷朝生「高橋道雄の人物相関について - 麓棠社時代とその後」『Northern Owl』Vol. 21、2012年3月。

13 岩船修三「30周年記念展を迎えて」『30周年記念全道展画集』全道美術協会、1975年、6頁。

諸国との溝を大きく感じていたのだろう。日本の文化水準を向上させるため、まずこの戦争に勝利し、諸外国と対等な関係を築かなければならない。そのように当時の岩船は考えたのであろう。

こうして報道部付画家となった岩船は次々に戦争記録画を制作することになる。ここからは岩船修三旧蔵の新聞記事スクラップや写真アルバム、複製図版や実作品を中心に振り返る。

A. 1941 帰国後最初の第七師団応召

岩船は正式に軍属となる以前の1941年に旭川第七師団の召集を受け、戦争画の制作を依頼されている。同年9月9日に完成した《ノモンハン血戦》(所在不明、図3)である。本作は師団部隊長の許可を得て制作されたもので、岩船本人が本作に傾けた思いを当時の新聞記事でつぶっている。

郷土部隊の奮戦、就中ノモンハン戦闘は世界戦史を飾った激戦であり何んとかして描きあげ度いと念願してゐた處偶々部隊長殿の許可をいただいて描かせて貰ひました、何しろ軍服を着ても大陸戦線に従軍して居ないので当時の勇士の指導を得て今回漸く完成出来ました、これは兵舎に掲げてもらひ永遠に須見部隊將兵の方々と共に讃え又護國の忠魂を慰め出来れば幸ひと思ひます¹⁴

地平線を高く取り広大な草原の中で上がる噴煙、画面中景には進軍する戦車、前方には狙撃する砲車兵の姿が見える。文中にある通り、実際に従軍していない岩船は報道部から提供される資料や現役の將兵をモデルにしながら縦三尺横五尺(約90×180cm)の油彩画を制作した。本作は完成後、第七師団が所有する北鎮兵事記念館(現・北鎮記念館)に展示されることとなった。

なお、本文に登場する須見は、須見新一郎少佐(のち大佐)のことで、札幌歩兵26連隊長でありノモンハン事件に参戦した。部隊員はほぼ全滅したものの、須見は生還した。郷土部隊も多く従軍したこの戦闘は北海道にとって重要であり、岩船以外の北海道ゆかりの画家も同様のテーマで制作依頼を受けていたことがわかっている¹⁵。

こうした岩船の制作活動の円滑な遂行には、報道部に

所属していた上官・中瀬少佐(図4)の理解があったようで、次のように回想している。

芸術家は芸術の途で協力することが、銃を持って人を殺したり、穴掘りをするよりもよいことと思ひ、当時の報道部の上官で軍人には稀な芸術に理解のある中瀬少佐の協力を得て、全道に、美術、文学、音楽、演劇の部門で陸軍報道奉公隊を結成することができた¹⁶。

回想にある陸軍報道奉公隊(陸軍美術奉公隊のこと、図5)は、1942年12月に結成された報國運動を旨とする北海道美術報国会とは別組織で、1943年8月20日に旭川第七師団報道部が独自に組織したもの¹⁷。美術報国会同様、音楽や文学、舞台芸術など各種芸術の部門を設け、旭川のみならず道内各地に支部があり、「美術部門の隊長には旭川の高橋北修、札幌は能勢眞美、小樽は国松登、釧路は佐々木榮松、函館は田辺三重松の諸氏¹⁸という人選だった。各部隊長は将校待遇を受けており、岩船らが中心となって、戦争美談を扱った大きな紙芝居や、公示用のベニヤ板に戦況を描くなど、美術家有志による広報活動を展開した¹⁹。

また、詳細は不明だが、岩船が案内役となり、陸軍美術奉公隊と思しき集団²⁰に対して、展覧会案内をしている写真も残されている(図6)。こうした戦時下における美術家たちの制作活動に関する広報も活動の一環として行っていたことが推測できる。

このほか、アルバム中には広報活動の一環と考えられる「招募街頭展覧会」(図7)のように戦闘場面を描いたパネルを野外展示する活動もしていたようだ²¹。

加えて、岩船ら美術奉公隊メンバーの重要な任務の一つに、組織を通じた絵具やキャンバス配給の管理があった。画材までもが、陸軍省の手に握られていた時代であった²²ため、旭川在住の高橋北修は、時々東京まで行き、「軍納」ラベルの貼られた絵具や、キャンバスを運ぶ役目を担っていた²³。市立函館博物館には当時の配給物と思われる田辺三重松旧蔵の絵具(図8)が残されている。

このほか、召集令状が来た画家たちのため連隊区司令部からの仕事を手配したり、従軍したいという画家の希望を聞き、北海道から派遣可能な千島従軍実現のための手配を行ったりといった事務仕事も担ったという²⁴。

14 「彩管に躍らす血戦譜 壮烈な國境戦を 先輩英魂に贈る岩船少尉」(新聞名不詳)、1941年9月頃。

15 能戸幸《ホロンバイルに於ける北鎮部隊》(1940年、所在不明)、居串佳一《ノモンハンに於ける北鎮部隊奮戦図》(1941年、所在不明)、菊地精二《死守(ノモンハン)》(1944年、函館護国神社蔵)。菊地は須見新一郎「實戦寸描」須見部隊記念会、1944年の装丁・挿絵も手がけた。

16 前掲注13、6頁。

17 「火戦につく彩管 旭川地区陸軍美術奉公隊生る」(北海道新聞(旭川版?))、1943年8月20日頃*。

18 同上。

19 今田敬一「北海道美術史」、北海道立美術館、1970年、231頁。

また、帯広では1945年に寺島春雄らによりベニヤ板36枚による大壁画「敵前上陸の図」が制作され、帯広駅前設置された。藪部容子「十勝美術年譜明治末～戦前戦中(2)」(北海道立美術館・芸術館紀要)第25号、北海道立近代美術館他、2014年、42頁。

20 参加者の上衣に同隊のワッペン(図5参照)が付いていることによる推測。

21 この他、軍人として道内各地の講演会にも出された。時には軍部の方針と合わない内容の講話を行い、憲兵に取り締まれることもあったという(渡辺まり氏のご教示による)。

22 1938年に公布された「国家総動員法」により絵具等の供出は制限されるようになる。1943年5月に「日本美術及工芸統制協会(美統)」と「日本美術報国会(美報)」が結成され、その規制はより強固なものとなった。参照:「日本美術及び工芸統制協会創立」、東京文化財研究所、2020年12月11日更新、(https://www.tobunken.go.jp/materials/nenshi/5441.html、2023年12月最終閲覧)

23 本田明二「全道展 そのなりたち」(30周年記念全道展画集)、全道美術協会、1975年、13頁。

24 実際に千島方面に従軍した画家は以下。前掲注1、35～36頁。

1943年7月:高橋北修、田辺三重松、能勢眞美

1944年6月:居串佳一、菊地精二、繁野三郎、松島正幸

1945年2～4月:高橋北修

1945年7～8月:大月源二、国松登、能勢眞美

旭川第七師団報道部が戦時下に催した一大事業に、北海道新聞社と大政翼賛会北海道支部の共催で行った「撃ちてし止まむ北海道聖戦美術展」の開催がある²⁵。1943年の第1回展は旭川護国神社回廊を皮切りに札幌、小樽、函館、帯広、釧路など道内各地を巡回する大規模な公募展であったが、以降は徐々に縮小した。この公募展は終戦の1945年まで、計3回開催されることとなる。2回目の1944年からは実際に画家たちが師団に赴き、画題をスケッチする「二日入隊」(図9、10)志望者の募集を北海道新聞社告に掲載し大々的に広報するなど、陸軍と新聞社が作品制作を主導した。岩船自身、第2回展に出品する記念碑的な作品を制作した。《山崎部隊アツ島玉砕決意》(図11～18)である。

B. 1943-44 《山崎部隊アツ島玉砕決意》の制作

1943年5月29日、山崎保代大佐(死後、中将)率いる部隊約2650名はアツ島にて壮絶な最期を遂げた。その凄惨な姿は「玉砕」という言葉で表現され、藤田嗣治《アツ島玉砕》(1943年、東京国立近代美術館無期限貸与)のように美術作品のタイトルでも使用された。本作は同年10月に札幌三越で開催された「忠烈山崎部隊景仰展」にも展覧。当時の北方軍司令官・樋口季一郎中将の前で藤田本人が作品解説をしたことが知られている(図19)²⁶。このほか同種の画題として伊藤彦造《山崎部隊隊長最期の図(未完)》(1943年、個人蔵)や陸軍省報道部監修《絵巻アツ島血戦》(1944年、函館市中央図書館等)などが制作された²⁷。こうした時代背景を鑑み、陸軍省より岩船本人へ同主題の作品制作の依頼が舞い込み、1943年末ごろから構想を練り、翌年1月中旬から2月末頃にかけて第七師団将校集会所図書室をアトリエとして与えられ、軍務の寸暇を縫いつつ250号の大作に取り組んだ。構図や肖像などはすべて報道部から得た情報を頼りにまとめたものである。

当時の新聞記事は作品について以下の通り報道している。

五月二十九日夜 最後の夜襲敢行の直前、遠く熱田灣を望むマサツカル峠に集結した山崎中將以下全員が遙か海上からの敵艦砲射撃を尻目に、勅諭を奉誦し、飯盒の蓋で別れの水盃を交はし、また最後の蓑(たばこ)を頒け合ふ等の様子をいささかの誇張もなく描

いてゐる、しかも従容として死地に臨まんとする皇軍將士の面目が、北の神秘的な白夜の中に凄愴感を超えてまざまざと再現されてゐる画面の左方には命令受領者に“最後の肉弾突撃”を命令する山崎中將、その背後に米川大佐及び江本海軍中佐の顔が見える²⁸

また、岩船自身、作品について次のように語る。

玉砕部隊中には多数の先輩がをるので、畫人としては無論軍人としても畢生の精根を打ち込みました、報道部からの資料その他を基にして下繪六十餘枚²⁹を描いたのですが、製作中モデルに頼んだ兵隊が三名も倒れた程です、従来所謂戦争畫には激烈な表情を描いたものが多いやうですが、日本人はいかなる苦境に立っても外國人のように仰々しく表に現はさない、その意味からこれは玉砕勇士たちの盡忠至高(じんちゅうしこう)の精神を現はし得た積りです³⁰

彼自身の言葉からも岩船が精魂かけて制作に取り組んだことが窺われる。完成した作品は同年2月28日に旭川第七師団の下見(図20)を得、翌日岩船自らが陸軍省へ持参。3月10日から東京都美術館で開かれた「大東亜戦争陸軍美術展」で公開後、旭川師団へと献納された³¹。

C. 1945 沖縄戦を描く

終戦の年となる1945年、岩船の階級は中尉へと昇格した³²。陸軍美術奉公隊での活動、記念碑的な作戦記録画の制作を担った功績が評価されてのことであろう。

日本の敗戦が色濃くなってきたこの時期、ついに戦況は本土決戦に至り、沖縄での戦闘が新聞記事にも掲載されるようになった。第七師団より1万人を超える派兵が行われたこともあり、沖縄戦での総死者数は沖縄県出身者の次に北海道出身者が多かった³³。こうした事実を受けて同年開催の「第3回 撃ちてし止まむ北海道聖戦美術展」では沖縄戦を主題とした作品も登場している。岩船の出品作《出陣の前》³⁴は「特攻兵」が突撃前の最後の一服をしている姿を描いたものであった(図21)。

旭川師管區報道部員室の隣室を畫室に敵艦必沈の決

25 なお、1942年には東京の聖戦美術展に出品された藤田嗣治や宮本三郎らの作品を展示する「大東亜戦争聖戦美術傑作展」が旭川、札幌、小樽、函館の道内4カ所を巡回した。前掲注1、48頁。

26 「生きて虜囚の辱を受けず⑤」死を神格化 国民陶醉」北海道新聞(全道版)、2014年12月3日。

27 各種報道はもちろん、『写真週報』(内閣情報局)等の写真誌や「玉砕軍神部隊」(1943年、日本教育紙芝居協会)等の国策紙芝居でも取り上げられ、一般大衆にもアツ島における「玉砕」イメージは流布していた。

28 「盡忠至高」畫布に再現 永久に残す“アツ玉砕”」北海道新聞(旭川版?)、1944年3月3日頃? *

29 下絵はゲートルの細部まで写實的に描いたものであったが、油彩では絵画の効果を高めるため筆触を残したり、ぼかしを加えたりしている(渡辺まり氏のご教示による)。

30 前掲注28に同じ。

31 同上。しかし、「アツ玉砕決意 寄贈者岡本氏に感謝状」北海道新聞(函

館版)、1944年7月4日では駐函館滿州帝国名譽總領事・岡本康太郎氏から旭川師団に献納されたものとされている。

32 「英靈に捧げる大壁畫 陸軍美術奉公隊員の彩管奉仕」北海道新聞(旭川版)、1945年5月20日*。

33 2023年6月23日現在、沖縄戦による国籍を問わない総死者数は24万1686人。出身地別では、北海道出身者は沖縄県に次いで2番目に多く、1万805人。なお、沖縄戦に派兵された北海道出身の生存人数は百数十人と伝えられている。参照：沖縄県子ども生活福祉部女性力・平和推進課平和推進班編「4 「平和の礎」刻銘者数一覧(令和5(2023)年6月23日現在)」、沖縄県子ども生活福祉部女性力・平和推進課平和推進班、2023年6月26日更新、(https://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/heiwanadanjo/heiwa/7623.html#heiwanaoishiji_kokumeishasu_3kengai、2023年12月最終閲覧)、および渡辺浩平「第七師団と戦争の時代 一帝国日本の北の記憶」白水社、2021年、303頁。

34 作品名は以下より引用。「力作を集めて 聖戦美術展幕あけ」北海道新聞(札幌版)、1945年6月16日。岩船は特別出品。

意を秘めていま出陣前の一服といった特攻隊員の悠容迫らざる姿を描く岩船中尉 沖繩に萬朶の櫻と散り征く特攻隊の神兵³⁵

以上、戦時下の岩船の作品を概観すると、各時期において北海道出身の兵士が多く戦死した戦闘に関する画題を報道部からの依頼で描いていたことがわかる。

このほか展覧会出品作とは別に、北海道護国神社の大鳥居を囲う高さ二間半(約450cm)、幅十間(約1800cm)の左右二枚の大壁画《沖繩婦女子の敢闘圖》が旭川在住の画家たちにより共同制作されたらしく、当時の記事は以下のように伝えている。

右側には沖繩本島の皇軍斬込隊に協力する婦女子の敢闘、B29に對するわが荒鷲の體當り激撃圖が既に完成、左側にはわが將兵と共にタクロバン敵飛行場へ殺到する半島同胞と高砂族の奮闘、沖繩に炸裂する神風特攻隊の必中體當り圖が旭川師管區報道部中瀬少佐の激励と同部員岩船中尉の制作應援でいま最後の仕上げを急いでゐるが某部隊入隊中の旭川美術奉公隊員堀川竹次郎一等兵も特に部隊の許しを得、劍筆一如の闘魂で彩管を揮ってゐる³⁶(図22)

岩船はこうした作品制作の総指揮をとりつつ、1945年8月15日の終戦以後、報道部尉官の任を解かれた³⁷。

5. おわりに 戦後の岩船のことなど

1945年8月、岩船は終戦に伴い第七師団の官舎を出て、市内にある新聞社の一室にアトリエを移した。函館に帰るよりも、旭川の方が比較的食糧事情がよかった、というのがその理由であったと伝えられている。戦後は、画家であることを知ったアメリカ軍将校の目にとまったため、ジープで迎えに来てもらい、室内装飾や、似顔描きなどに出向かざるをえなかったという³⁸。

こうした生活を続けていた矢先、同年9月に北海道新聞の事業部長から北海道に新たな美術団体を作りたいので、まとめ役をお願いしたいと岩船に直接連絡があった。第七師団報道部で全道の画家仲間の調整役を引き受け、陸軍美術奉公隊等の運営事務にも関与していた組織力の高さが評価されてのことであろう。また、戦争中は多数の作家が道内に疎開しており、連絡をつける人物の多くが岩船の顔なじみであったことからよい機会と考え、その役目を二つ返事で承諾した³⁹。

岩船を筆頭に道内画壇の有力者たちの尽力により、多くの賛同者が現れ同年12月、晴れて「全道展」が結成された。こうして戦後の北海道美術界を支える組織が誕生し、道内の美術文化の水準は大きく向上することとなる。

戦時下の岩船は、旭川第七師団報道部付の尉官待遇であったことなどから「ノモンハン事件」、「アツツ島の戦い」、「沖繩戦」を題材にした戦争記録画制作に携わった。その画題はいずれも第七師団出身者、とくに北海道出身者の多くが命を落とした激戦であった。これらの戦没者を弔う意味でも報道部付画家として作戦記録画の制作を依頼されたのであり、岩船以外の北海道ゆかりの画家たちもこれらを主題とした作品を描いている。それらの画題は北海道に生きる当時の人々にとって記録し、記憶を継承すべき主題だったのであろう。一方で、いずれの戦地にも従軍経験のない岩船は軍部から提供される資料や、軍事演習を行う陸軍兵の姿を写生することで作品を制作した。こうした作品の多くは戦後の混乱のなかで意図的な処分を含む消失のためか現在も見つかっていないものも多いが、《山崎部隊アツツ島玉砕決意》は1962年5月11日に函館護国神社へ奉納されており⁴⁰、今後の「戦争と美術」研究の進展に欠かせないものとなるだろう。

日本美術史における戦争画が「日本美術の空白」⁴¹と形容されて久しい。しかし、過酷な戦時下においても制作活動は継続されており、それらの作品とその時代に構築された人と人とのつながりが礎となり戦後美術史が紡がれていることは忘れてはならない。作品制作および美術団体の活動継続、また後年への記憶の継承という観点から考えても、戦時下の各作家の制作活動に対するためめ見直しは必要不可欠といえるだろう。

謝辞

本稿執筆にあたり、次の方々にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。(順不同、敬称略)

渡辺まり

岩船洋子

大橋幸生

内田彩葉

函館護国神社

市立函館博物館

北海道立近代美術館

函館市中央図書館

旭川市中央図書館

35 「近づくと聖戦美術展 彩管に罩める赤誠 必勝の制作戦いま酣(たけなわ)」(新聞紙名不詳)、1945年5月末頃*。

36 前掲注28。

37 正確な日付は未調査のため、現時点では不明。

38 全道展結成メンバーの本田明二によると、「(岩船が)画家であるということで、今度はアメリカ兵がジープで迎えに来、室内装飾や、似顔描きなどさせられた。そのたびにいやいや出さなければならなかった」とある(前掲注23、13頁より引用)、および渡辺まり氏のご教示による)。ただし、本田の

回想では「読売新聞旭川支社」となっていたが、当時は北海道新聞以外の支局は存在しないため、北海道新聞旭川支局と考えられる。

39 同上。

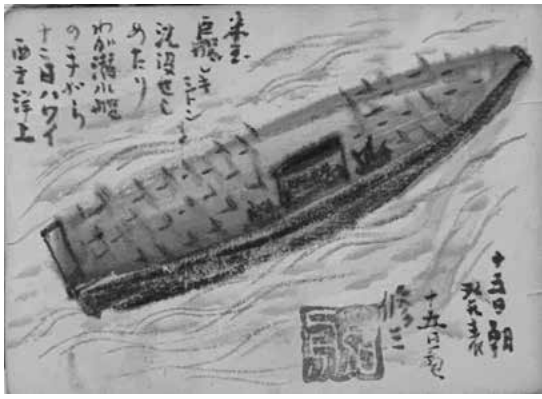
40 「岩船画伯 大油絵奉納」(函館護国神社々報)第6号、1962年1月1日、2頁。「汐見ヶ丘物語(四)アツツの桜」(函館護国神社々報)第7号、1962年5月11日。

41 米倉守「戦争絵画 日本美術の空白の部分 白日下での評価期待」(朝日新聞)、1977年3月14日夕刊。

資料：『旅道づれ』（別タイトル：修三スケッチ日記）リスト

No.	記載事項	モチーフなど	図版番号
1	『旅道づれ』	カバー	図S-1
2	修三スケッチ日記	総表紙	
3	新しき年を迎え ■■■■孝子と共に 修三 昭和十七年一月十三日画	花	
4	手製のつる手に なつかしき思い出あり 昭和十七年一月十四日画 修三	やかん	
5	米国■艦レキシ(ン)トンを沈没せしめたり わが潜水艦の手がら 十二日ハワイ西方洋上(一月)十五日 朝発表 十五日夜 修三	米国航空母艦、戦況	図S-2
6	一月十五日夜画 夜食後ポーズ 孝子像 修三	孝子	
7	永田兄、石川兄ト共ニ孝子の手料理にて 酒杯を交し共に語らい 健康を祝して夜を更す 修三画 昭和十七年一月十六日夜	夕食	図S-3
8	光風会出品作に■る 修三 一月十九日	光風会出品制作	
9	■■■■のわざ■■の■髭面 親友松山君 来る楽しく ミカンとライスカレーにて夕食も修三 一月二十一日	夕食	
10	泰国英米に宣戦布告ス 一月二十五日 四時半 興野の■■■先生宅訪問■留守 一月廿五日 修三画 六時 小石川の佐藤君宅 訪問九時まで ■■■應	宣戦布告(タイ)、戦況	図S-4
11	歌捨会(?)始ノ記トシ 修三画 一月廿六日 連峯雲	風景(連峰)	
12	松原潔君来訪 小樽高商の卒業 北京へ就活の途 前途■■■の■■ 一月廿■日 修三画	来客(出発の挨拶)	
13	修三 一月廿八日 祖母・永眠ス	祖母、蓮	
14	同行二人 青森行 急行二等 一月廿八日 祖母急亡霊前ヲ■■■ 修三画	切符、汽車	
15	実相院妙技 一月廿九日 函館ニテ通夜 修三	通夜	
16	故郷の函館は冬寒し 一月廿九日 修三	函館港?	
17	青■の雪空に 安宿の三階の夕食は ものかなしき (二月)七日 修三	宿?(せき旅館?)	
18	二月九日 皇軍シンガポールへ進入ス 修三	兵士	図S-5
19	煙草をくゆらして 心平かなる日 友恋し 二月十日 修三	パイプ	
20	孝子台所にて 漬物をつくる 野菜切る音して 心楽し 二月十日 修三	台所	図S-6
21	皇軍 シンガポール市街へ突入ス 紀元節(二月)十一日	国旗	
22	シンガポール陥落■ (二月)十六日午後十時 修三	シンガポール陥落	図S-7
23	日本落下傘部隊 セレベス島ハ 初ノ姿を見せる (二月)十七日 修三	落下傘部隊	図S-8
24	海の守りは難し 南海洋我海軍の勢力下にあり 修三	海洋、軍艦	
25	枯枝も花を咲かせて 今朝の雪 二月二十四日 修三	庭園	
26	修三	手、筆	
27	三月九日午後三時 蘭印無条件降伏ス 上陸以来九日 修三	兵士	図S-9
28	藤哉君 受験ノタメ 上京ス 三月四日 修三	カバン、メガネ、帽子、ノート、ペン	
29	三月十日 孝子炭火ニ酔ヒテ台所ニタラル 修三 腕ト背ニヤケドスル 医者ト渡辺様■ 母サン藤哉君ノ御手配ニテ意識快復ス	炭火、注射	
30	三月十四日 夜十二時 修三画 孝子の腕の■深く心安うならず	入院中	
31	水仙之図 修三画 三月十五日	水仙	
32	孝子寝むる 三月十五日 修三	孝子	
33	五十嵐様 お父さん上京され おみやげ沢山を頂戴す 三月十六日 修三	鯛サーディン缶	
34	藤哉君 見事バスの 金的を射落とした 三月十七日 修三	藤哉(親戚)	
35	五十嵐のお父さん 石川君 小生と 杯を交す 昭和十七年 三月十八日夜 修三	乾杯	図S-10
36	三月二十一日 修三 藤哉君 第二次発表ニ残念ながら落ちた 心から同情ニ耐えない	合否発表	
37	五十嵐様のお父さん お帰りになる 上野駅にて 三月二十一日 修三画	集合	
38	修三 二十式日朝 (前)略 満員で乗れませんし 家にも未だ帰りたくもない 結局ふらっと飛驒の方に行つて来ます 時■の事を考え心を大きく持って帰ります お別れの時は胸が一ぱいで何も言えませんでした ではさようなら 11時駅にてふじや 藤哉君よ 元気にあれ大なる■■■をもたれよ	汽車	
39	修三 三月二十四日	孝子?	
40	修三画 四月五日(?) 印度洋上 海空呼應して コロンボ■■■ふ	航空機、戦況	図S-11
41	五日■荒鷲印度洋全面を 翼下ニおさめたり 四月十日 修三画	荒鷲、戦況	図S-12

No.	記載事項	モチーフなど	図版番号
42	ガンジー翁英国■■■反対し頑張る 修三	ガンジー	図S-13
43	印度洋上ニテ 飛行母艦一艇洋艦四隻落せしめたり 修三	戦艦、戦況	図S-14
44	どう云ふものか友軍飛行機の姿の少なし 黒星を附けた残念 午後零時半 四月十八日帝都ニ初空襲 修三	航空機、戦況	図S-15
45	招待状一二〇〇枚 愈よ個展の真近なり 「岩船修三滞欧帰朝作品展 日動畫廊」(四月)二十日 修三画	展覧会(岩船修三滞欧帰朝作品展)	図S-16
46	四月十三日(?)修三 満洲より東京へ渋田御夫妻入京 クチラ タコ タヒ イカ カヒ	船、魚	
47	四月二十五日 二十六日 二十七日 滞欧作展示開く 修三画	展覧会(岩船修三滞欧帰朝作品展)	図S-17
48	修三画 五月二日	花	
49	煙草 閑人座 忘機 修三	肖像	
50	孝子像 五月六日夜 修三画	孝子	
51	(五月)八日 大掃除日 八郎さん 御手伝いできる(?) 修三	大掃除	
52	(五月)十四日 近藤様宅 訪問す 修三画	訪問	
53	六月八日兄さん姉さん やっとちゃんと上京す 修三画	家族	
54	二等 田名部行 一人旅 田名部の国さん 迎いに出て下さる 八月二十八日 修三	旅行	
55	国さんの御案内にて■■■様の 風光観(?)に出かける明るい初手のボツボツ汽罐車にゆられゆられて(八月)二十九日 修三画	汽車	
56	函館棧橋に久振りに帰る (八月)三十日 修三画	かもめ丸	
57	制作に大沼にてかかる (九月)三日 修三画	制作中	図S-18
58	(九月)七日 宮前昭(?)を訪問す 修三画	訪問	
59	(九月)十七、十八、十九日 防空演習 修三画	防空演習	図S-19
60	松山君ト将棋ヲ指ス 修三画 (九月)二十三日	将棋	
61	函館港出帆 (九月)二十六日 修三画	函館出港	
62	静子ちゃん防空演習 に活躍して呉れる (十月)七日 八日 修三画	防空演習	
63	十四■■■ 自信>落選 (十月)十日 修三画	天秤	図S-20
64	江(ノ)島見物 静子ちゃんと共に 修三画	江ノ島	
65	静子嬢帰函ノ途■■■ 十月十九日 修三画	静子	
66	ソロモン海戦にルーズベルト氏 膽ヲ冷ス 修三画	ソロモン海戦	図S-21
67	おきよちゃん哲行坊ト 上京す 十月廿一日 修三画	母子	
68	この愛(子)ハ哲行坊 修三画	哲行	
69	孝子九ヶ月目に入る 十一月 修三画	孝子	
70	噫々悲しき日 十二月十二日 由幸坊死シテ生ヲ天空在架に空く 父修三画	息子・没	
71	智光孩子 佛の恵みにて安らかに眠れ 父修三 母孝子	息子・没	
72	智光孩子 (十二月)十四日 十方寺ニ遺骨を納む 坂田住職・懇ニ弔フ 修三画	息子・遺骨	
73	不幸中ノ幸ニモ 孝子経過良好 (十二月)十五日 修三画	孝子	
74	静子ちゃん 急ぎ上京さる 孝子大よろこび 修三画	静子	
75	■手の叔母さん 渡辺のおばアちゃん 御二人にとても御世話になりました 修三記	親戚	
76	旧麓業社 再組織ス 十二月十日 修三	肖像	図S-22
77	孝子産後二週間目ニ 入り床の上に起キル 修三画	孝子	
78	制作ニカカル (十二月)廿四日 修三画	制作中	
79	守りハ堅シ 銃後ノ守り	サーベル	図S-23
80	本年ハ鐘モオ一線ニ応召シテ大晦(日)ノ除夜鐘音ハナシ 修三	金属回収	図S-24
81	浅草見物(昭和十八年)一月三日 収君、御父さんと初の上京 浅草観音へ出かける 修三	浅草見物	図S-25
82	父さんを中心に 静子ちゃん、収君、孝子、僕、皆な持って楽しく中食をとる 修三画	食事	
83	友達の菊池様から珍しいソーセイヂをいただく 修三画	ソーセイヂ	
84	静子嬢の悲劇 修三画	静子、かけた茶碗	



図S-2



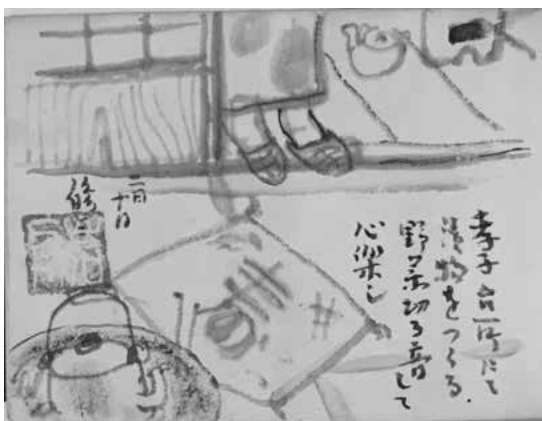
図S-3



図S-4



図S-5



図S-6



図S-7



図S-1

- 図S-1 絵日記帖『旅道づれ』カバー ★(S-1~25すべて)
- 図S-2 米艦レキシ(ン)トンを沈没せしめたり
わが潜水艦の手から 十二日ハワイ西方洋上
(一月)十五日朝発表 十五日夜 修三
*岩船はこのニュースを、新婚旅行で訪れた大阪・心齋橋を散歩中に知った(渡辺まり氏のご教示による)。
- 図S-3 永田兄、石川兄ト共ニ孝子の手料理にて
酒杯を交し共に語らい 健康を祝して夜を更す
修三画 (昭和十七年)一月十六日夜
- 図S-4 泰國英米に宣戦布告ス 一月二十五日 四時半
興野の■■先生宅訪問■留守 一月廿五日 修三画
六時 小石川の佐藤君宅 訪問九時まで ■■■應
- 図S-5 二月九日
皇軍シンガポールへ進入ス
修三
- 図S-6 孝子台所にて 漬物をつくる
野菜切る音して 心楽し
二月十日 修三
- 図S-7 シンガポール陥落■
(二月)十六日午後十時 修三

*■■は解读できず、()は筆者補足、★は岩船修三旧蔵資料(現・市立函館博物館蔵)



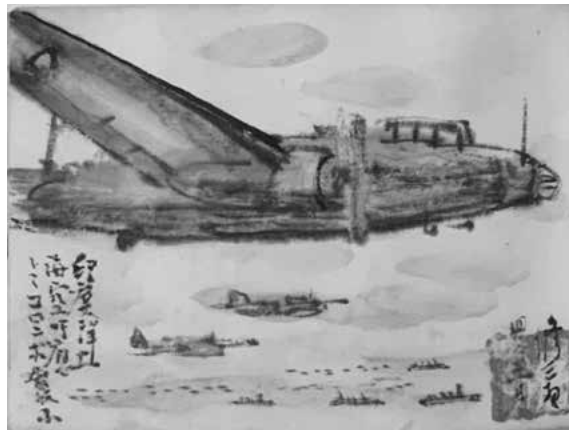
図S-8



図S-9



図S-10



図S-11



図S-12

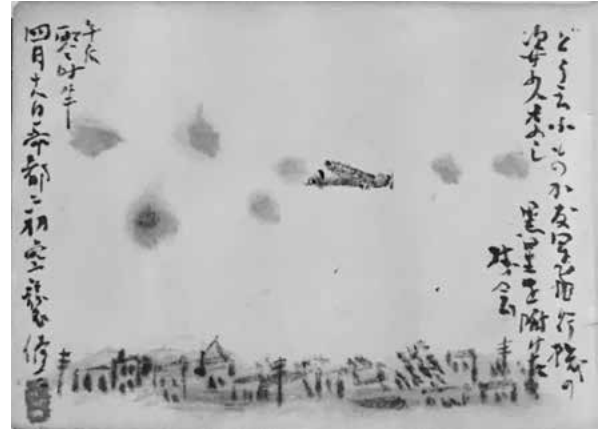


図S-13

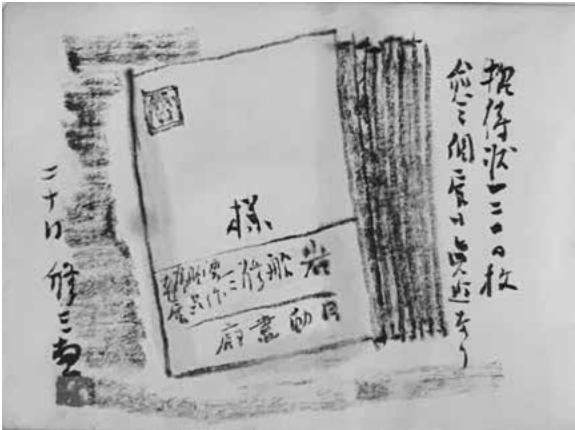
- 図S-8 日本落下傘部隊 セレベス島ハ
初ノ姿を見せる (二月)十七日 修三
- 図S-9 三月九日午後三時 蘭印無條件降伏ス
上陸以來九日
修三
- 図S-10 五十嵐のお父さん 石川君
小生と 杯を交す
昭和十七年 三月十八日夜 修三
- 図S-11 修三画 四月五日(?)
印度洋上 海空呼應して
コロポ■■ふ
- 図S-12 五日■■荒鷲印度洋全面を
翼下におさめたり
四月十日 修三画
- 図S-13 ガンジー翁英国■■反對し頑張る
修三



図S-14



図S-15



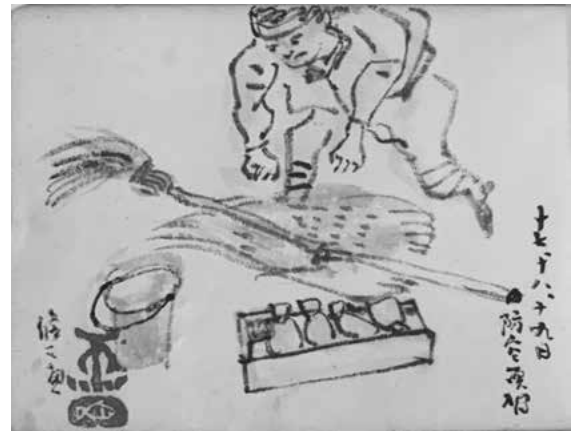
図S-16



図S-17



図S-18



図S-19

- 図S-14 印度洋上ニテ 飛行母艦一艇洋艦四隻落せしめたり
修三
- 図S-15 どう云うものか友軍飛行機の姿の少なし
黒星を附けた残念
午後零時半 四月十八日帝都二初空襲 修三
- 図S-16 招待状一〇〇枚 愈よ個展の真近なり
「岩船修三滞欧帰朝作品展 日動畫廊」
(四月)二十日 修三画
- 図S-17 四月二十五日 二十六日 二十七日
滞欧作展示開く 修三画
- 図S-18 制作に大沼にてかかる
(九月)三日 修三画
- 図S-19 (九月)十七、十八、十九日 防空演習
修三画



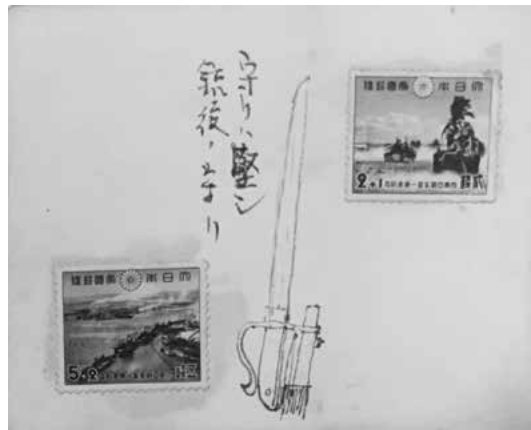
図S-20



図S-21



図S-22



図S-23



図S-24



図S-25

- 図S-20 十四■■■
自信>落選
(十月)十日 修三画
- 図S-21 ソロモン海戦にルーズベルト氏 胆ヲ冷ス
修三画
- 図S-22 旧麓業社 再組織ス
十二月十日 修三
- 図S-23 守りハ堅シ 銃後ノ守リ
- 図S-24 本年ハ鐘モオ一線ニ応シテ大晦(日)ノ
除夜鐘音ハナシ
修三
- 図S-25 浅草見物
(昭和十八年)一月三日
収君、御父さんと初の上京 浅草観音へ出かける
修三



図1

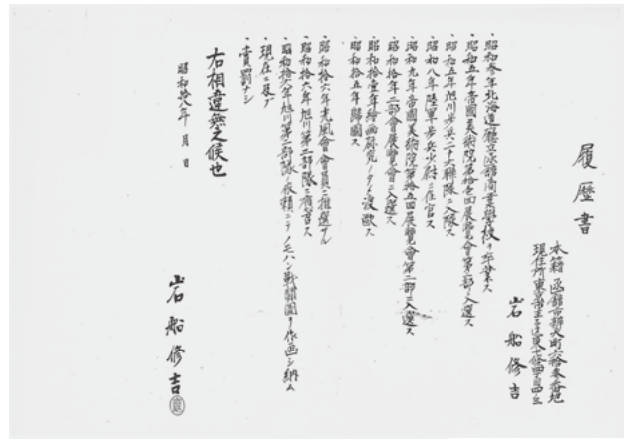


図2



図3



図4



図5

- 図1 陸軍美術協会主催・寒稽古スケッチ、東京麹町国民学校にて、1940-41年頃？（「畫帖に納む 戦場の姿 彩管寒稽古始る」『(新聞名不詳)』日付不詳）★
左から2人目が岩船、その右隣が藤田嗣治。藤田の手前は宮本三郎。
*タバコをくわえながら写生した岩船は、憲兵に連行されたという（渡辺まり氏のご教示による）
- 図2 旭川第七師団報道部提出用の岩船修三履歴書(写)、1943年 ★
- 図3 旭川第七師団図書室にて《ノモンハン血戦》を描く軍服を着た岩船、1941年、北海道立函館美術館蔵（「彩管に躍らす血戦譜 壮烈な國境戦を先輩英魂に贈る岩船少尉」『(新聞名不詳)』1941年9月頃？）
- 図4 旭川第七師団報道部・中瀬少佐(左)と岩船、1943-44年頃 ★
- 図5 陸軍美術奉公隊のシンボル、1943年8月20日頃（「火戦につく彩管 旭川地區陸軍美術奉公隊生る」『北海道新聞(旭川版?)』1943年8月20日頃？）★



図6



図7



図8



図9



図10

- 図6 展覧会を案内する岩船、1943-44年頃? ★
「漁労」を描く作品の前で
- 図7 召募街頭移動展、旭川市内、1945年 ★
右から2人目より小浜亀角、1人とばして高橋北修、岩船
- 図8 田辺三重松旧蔵の「軍納」ラベルの貼られた器具、市立函館博物館蔵
- 図9 旭川第七師団二日入隊、素描の様子、1944年（「早くも素描戦始る 紅五點も交り『美術家二日入隊』」『北海道新聞（旭川版）』1944年5月頃）★
- 図10 旭川第七師団二日入隊集合写真、1944年 ★
後列左から2人目より能勢眞美、国松登
前列左端より田辺三重松、中瀬少佐、岩船、高木黄史、小川マリ



図11



図12



図13



図14



図15



図16



図17



図18

図11 《山崎部隊アツ島玉砕決意》1944年、函館護国神社蔵

図12 図11部分 “肉弾突撃”を命令する山崎中将。その背後には米川大佐、江本中佐

図13 図11部分 軍人勅諭を奉誦する兵

図14 図11部分 止血を施す兵

図15 図11部分 戦闘帽の紐を締め直す兵

図16 図11部分 銃を受け取る兵

図17 図11部分 飯盒の蓋で別れの水盃を交わす兵

図18 図11部分 別れのタバコを渡す兵



図19



図20

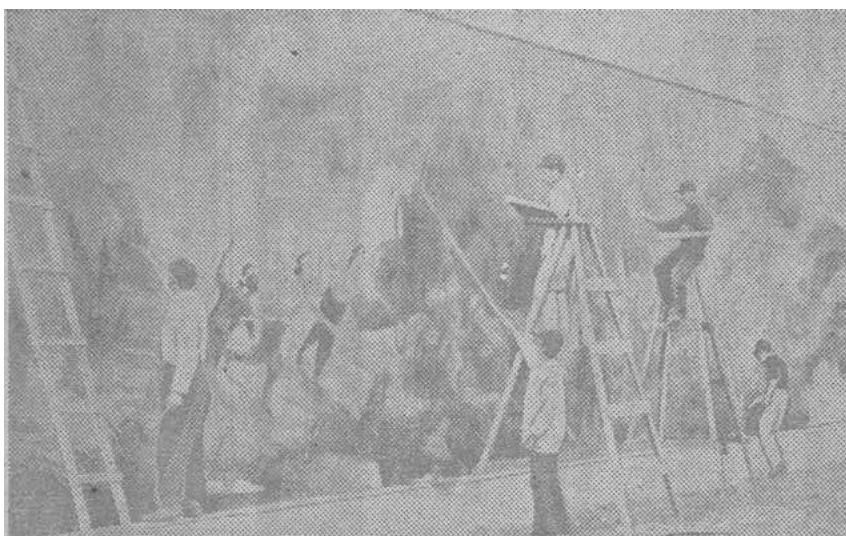


図22



図21

- 図19 《アッツ島玉砕》を樋口季一郎中将(中央)に説明する藤田嗣治(左)、1943年10月2日、札幌(初出:「名畫に偲ぶ玉砕 樋口司令官景仰展へ」『北海道新聞(札幌版)』1943年10月3日、写真は「生きて虜囚の辱を受けず⑤ 死を神格化 国民陶醉」『北海道新聞(全道版)』2014年12月3日より転載)
- 図20 《山崎部隊アッツ島玉砕決意》の前で解説する軍服姿の岩船(右)、1944年 幹部への説明(「盡忠至高」畫布に再現 永久に残す“アッツ玉砕”『北海道新聞(旭川版?)』1944年3月3日頃?掲載) ★
- 図21 沖縄戦出陣前の飛行兵を描いた《出陣の前》制作中の岩船、1945年、北海道立函館美術館蔵(「近づく 聖戦美術展 彩管に罩める赤誠 必勝の制作戦いま酣」『(新聞紙名不詳)』1945年5月末頃)
- 図22 北海道護国神社の大鳥居にて、旭川陸軍美術奉公隊描く沖縄決戦大壁画、1945年(「英靈に捧げる大壁画 陸軍美術奉公隊員の彩管奉仕」『北海道新聞(旭川版)』1945年5月20日)★

1. はじめに
2. シャーマンへのインタビュー 1991年2月4日－Ⅱ
3. インタビューからわかる交友関係
4. おわりに

1 はじめに

本稿は、『北海道立美術館・芸術館紀要』第31、32号の拙稿「フランク・シャーマンへのインタビュー」¹の続編であり、今回と第32号分をあわせて、1991年2月4日のインタビュー全体の3分の1ほどになる。残りの部分については引き続き公開していく予定である。

筆者は、2018年に北海道立近代美術館で開催されたシャーマンコレクション展とそれに先行して発行したコレクション選の編集を担当した²。当時は、シャーマン自身とその交友、コレクションについて不明な点が多かったが、展覧会終了後、調査によって少しずつではあるが詳細が明らかになってきた。

シャーマンと親交があった河村泳静は、1980年代終わり、日本語での回顧録を出版したいというシャーマンのために奔走し、朝日新聞美術記者だった米倉守に執筆を依頼した。シャーマンが日本語での回顧録を望んだ背景には、当時の日本における藤田嗣治評が自分の知っている藤田像と異なっていたこと、戦後まもない時期から長年にわたって見聞した日本の姿を記録に残したいという思いがあったという³。

米倉は、1991年2月2日、4日、5日に東京ヒルトンホテル(現・ヒルトン東京)で行われたインタビューには不在だったが、河村とインタビューで通訳をつとめた中川佳子によると、米倉は、インタビューに先だって東京駅の喫茶店でシャーマンと会い、また、ホテルインタビューの後日、通訳の中川、河村同席で何度もシャーマンから話を

聞いている。この頃、河村は、回顧録準備のため都内に一室を用意し、アメリカから日本にコレクションを運んだ(図1)。シャーマンがインタビュー実施から1年もたたない1991年10月に急逝した後、コレクションは河村が継承し、2007年以降2024年3月現在に至るまで、伊達市教育委員会に寄託されている⁴。

シャーマンは交友があった画家たちの作品をコレクションしていたが、ミュージアムピースになるような作品は、ほぼ生前に手放している。それらの作品について、藤田嗣治に関しては主な所蔵先がわかっているが、他の作家については確認できていない。

藤田作品は、1977年の『藤田嗣治展』図録⁵に図版掲載され、その多くが1987年に開館した目黒区美術館に収蔵された。開館時にまとまったコレクションを収蔵した同館では、これまでに何度かシャーマン・コレクションとしての展示紹介を行っている⁶。代表作《五人の裸婦》(東京国立近代美術館蔵)については、2023年に都築千重子らによって入手時の経緯が展覧会と紀要で報告された⁷。《植物の中の裸婦》は、昭和30年代後半にポーラ創業家2代目・鈴木常司が入手し、現在はポーラ美術館のコレクションとなっている⁸。

一方、藤田以外の作家については、典拠となるのは、シャーマンが残した言葉や親交が深かった朝日晁⁹の文章しかないのが現状である。朝日は、1994年に目黒区美術館で開催された『フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち』展図録の中で、シャーマンから神奈川県立近代美術館に「国吉康雄のリトグラフ《カーニヴァール》」が譲られたと記述している。また、同図録には、神奈川県立近代美術館の「松本竣介・島崎鶏二展」会場(1958年)で、シャーマンが「ちょうど来館していた禎子夫人を紹介すると、作品への感動からカメラを向けた。後日竣介

1 佐藤由美加「フランク・シャーマンへのインタビュー①：1991年2月2日」『北海道立美術館・芸術館紀要』第31号、北海道立近代美術館他、2022年、61-88頁；同「フランク・シャーマンへのインタビュー②：1991年2月4日」同書第32号、2023年、32-38頁。
2 「フランク・シャーマンコレクション あるアメリカ人の見た戦後日本美術」展、北海道立近代美術館、2018年4月21日-6月24日。2018年4月1日付で筆者が北海道立旭川美術館に異動したため開催時点では後任が担当。「河村泳静所蔵 フランク・シャーマン コレクション選」北海道伊達市教育委員会、2018年。
3 2023年10月19日、河村泳静より聞き取り。70歳になったシャーマンが第二の人生を考えていた時期であり、1988年出版の田中穰「評伝 藤田嗣治」(芸術新聞社)に違和感を抱いていたこと、藤田嗣治夫人君代が、「レオナルド・フジタ展」(1986～87年)展覧会カタログについて訴訟を起こして話題になったことなども影響しているという。
4 コレクションは、伊達市噴火湾文化研究所に保管されている。寄託後、絵画、書籍、写真、手紙類などにおおまかに分類され、番号が付されたものについては画像データを作成し管理。2018年時点で作家名が判明した作品を掲載したものが、註2のコレクション選。
5 『藤田嗣治展』図録、1977年、小田急グランドギャラリー、藤田嗣治展開催委員会、111頁。この展覧会は、シャーマンと平野政吉コレクションが主で、出

品リストにそれぞれのコレクションを掲載。
6 1994年に旧シャーマンコレクションの藤田作品を一堂に展示し、『目黒区美術館年報平成6年度』10頁に「所蔵作品展 レオナルド・フジタ」の出品目録掲載。この展示は、「フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち」展と同時に開催。「ミュージアムシート037」(目黒区美術館、2023年)、菅田あゆみ「コレクション解体新書Ⅰ「フジタが目黒にやって来た」作品収集の歩み」(2-3頁)で、朝日晁が収集委員の代表だったこと、シャーマンコレクションは1981年から候補作品だったことが紹介されている。
7 修復研究所21(渡邊郁夫、有村麻里、宮田順一)、林洋子、都築千重子「藤田嗣治《五人の裸婦》《自画像》の科学調査と修復から—1920年代の藤田の絵肌の検証を中心に」『東京国立近代美術館研究紀要』第27号、2023年、59-80頁。展示は「コレクションによる小企画 修復の秘密」東京国立近代美術館、2023年3月17日～5月14日。
8 日動画廊社長・長谷川徳七によれば、父・仁が社長だった昭和30年代後半(まだ徳七は画廊勤務前)に納めたとのこと。2023年11月8日電話取材。
9 朝日晁(1928-2016) 神奈川県立近代美術館在職中、シャーマンと知り合い、親しく交友するようになる。1958年に同館で開催した「松本竣介・島崎鶏二展」担当者。1994年の「フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち」展図録(目黒区美術館)に「SHERMANが見たもう一つの戦後の洋画史」執筆。

の油彩が欲しい、といい始め夫人も諒解、会場で記憶した作品は、現在岩手県立博物館の収蔵する《裸婦》(1947年)ともある¹⁰(図2、3)。神奈川県立近代美術館の国吉、岩手県立美術館の松本、両作品の入手先はどちらも日本の個人や画廊となっている。また、岩手県立美術館の松本峻介《裸婦》は、神奈川県立近代美術館の展覧会に出品されていない。現在、展覧会出品作は、東京国立近代美術館に収蔵されているが、同館の作品収蔵は2004年、シャーマンの死後である。交友のあった岡田謙三について、シャーマンは1991年2月2日のインタビューの中で、岡田存命中にニューヨークの個展で購入したblue paintingを東京国立近代美術館が収蔵していると語っているが、同館にシャーマン旧蔵だったことが確認できる作品はない¹¹。

美術館がシャーマン旧蔵作品を所蔵していたとしても、シャーマンから直接入手していないため、そこから旧蔵者としてシャーマンの名前を確認することは難しい。

藤田に関しては、もともとシャーマンが藤田コレクターであることが知られており、旧蔵作品が印刷物に掲載され写真も残っている。他の作家については、シャーマンの手元にあった頃の写真画像が確認できないため、シャーマン旧蔵作品がどの作品で、現在、どこに所蔵されているかを明確にすることは困難な状況となっている。

これらは、今回、各関係者への照会によって確認できた。本稿の目的は、インタビューを他の関連資料と照合し情報を精査していくことである。

2 シャーマンへのインタビュー 1994年2月4日-II

S: フランク・シャーマン

M: 三好寛佳(インタビュアー)

N: 中川経子(通訳)

K: 河村泳静(インタビュー途中から参加)

* シャーマンの英語については、なるべく音声に忠実に記載している。

* 後述の註において本文中の記述に言及した箇所に【1】～【11】を付した。註の順番に番号を付しているため、数字は掲載順と異なる。

M: いつどこでどうしたということよりも、シャーマンさんがいかに藤田とときを過ごされたか、周辺の若い画家と、どのような交際が続いたか。おおまかに藤田が日本を出て行くまでの間のシャーマンさんのご記憶にあるかぎりの藤田との交際の日々を思い起こしていただけますか？

N: So, uh, this is going to be, I think, your...your story. It's going to be so great. Uh, could you tell us how you spent, you know, time with...with Foujita-san and all other, uh, colleagues or painters, you know, in Japan be...until, uh, Mr. Foujita's departure from Japan to USA.

S: Yeah.

N: You can give us any reco...recollection what so ever. Any memories?

S: Of after he or before he...?

N: Before he left.

S: Before he left.

M: いいことも悪いことも。いいことだけではなく。当然いやなこともあるので。

N: And please include even negative stories, of course, you know.

S: Oh, thank you! Well, Oka Shintsunosuke.¹²..Oka?

N: Oka? Uh-huh.

M: Oka.

S: Yeah. Oka. Shintsunosuke.

N: Oka Shinnosuke-san?

M: Oka Shikanosuke!

S: Yes! Yes.

N: Shikanosuke-san.

S: He was the closest friend of Foujita.

S: Closest.

S: And he took me to his house because I know he had a small picture of only a bed...and a small room. And that picture, I loved it so much! So it was from Foujita's early period. And so, he said, "You like it? That's good. That's...I liked very much." Then he took me to Oka house and Oka took me up to see it.

S: It was only this big.

S: And you know what it was? It was a picture, upstairs in the garage in Paris, when Foujita was living up in the garage.

S: And Patreed...not Patreed...but, uh, I forgot his name. I forgot. I have his picture. I found a portrait of Foujita's first patron.

S: I...in the catalog, I have a picture.

S: Uh...that man, that time, um, gave Foujita money for his paintings. But that was the period. First time he got recognition.

10 前掲註9 朝日晷「SHERMANが見たもう一つの戦後の洋画史」9頁。岩手県立博物館の松本作品は、現在岩手県立美術館が収蔵。

11 前掲註1 拙稿、第31号、71頁、"Then I took the painting to Japan and brought it to the Metropolitan Museum here. And um...got it accepted. His first painting in the museum."中川が、"Is it a national museum, or metropolitan?"と確認、"next to the Bridgestone. And then it moved and I don't know now. Tokyo.と答えているため、当時京橋にあった国立近代美術

館(1952年開館、1969年に竹橋へ移転した現・東京国立近代美術館)と考えられる。岡田の最初の美術館収蔵作品だと言っているが、東京国立近代美術館の3点のうち最初の収蔵作品《元禄》(1958年収蔵)は、作家からの購入であり、blue paintingでもない。《オレンヂ》(1974年収蔵)も作家から、《緑と白》(1958年)はシャーマン没後の1994年寄贈作品。

12 岡鹿之助(1898-1978) 1924年から1939年まで滞仏し、藤田嗣治と親しく交友。

S: Then this little picture, he gave it to Oka.
M: 岡か。
S: And it was Foujita's favorite picture. And when Oka died, I heard about it in the States and I just wondered, "Oh my God. What happened to that picture?" That was so...the two of them had such a close friendship, cause the two of them were too young...Japanese boys in Paris with no money.
N: Uh-huh.
S: And living so poor. So...
N: You don't remember the name of the patron of Mr. Foujita? The first patron.
S: Oh, I have that...
S: ...works of Foujita go in. So I went out Versailles. And this drawing came up...and I recognized the name. ^[9] So I kept my hand up all the time.
N: Uh-huh.
(15秒ほど無音)
S: So I got photos of it.
N: Uh-huh. Yeah. No one cared!
(河村が到着)
S: Hi. Good morning!
K: Good morning.
M: その話を続けてください。
N: Okay, go ahead.
S: Yeah. So that, um, when people always...we could make a big mistake by saying, you know, that this man, he liked...I could make a big mistake with Foujita because he was very definite on who his friend was. And so I had to...I had to go a certain line. I never could invite anybody with me to his house. Had to come only me.
N: I see.
S: And he wouldn't make new friends. I never tried to.
S: He had such a memory for anybody who did him wrong.
S: So I had a lot of trouble, because I wanted him to be more free. But he...
M: 当時、藤田は日本の画壇でトップクラスの画家であり、これまで名前が出てきている脇田(和)や猪熊(弦一郎)は、今でこそ著名ですが、当時は藤田の後輩で、藤田に教えを受けていた立場でした。シャーマンさんは、藤田の社会復帰、巨匠の自信を取り戻しなさいよと、そういうお気持ちだったと思うのですが、精力的にGHQのパーティーとか、皇族と一緒に会見の場とか、旅行、京都への旅行のお話とか出てきましたが、そうしたことをセッティングされた。それらを詳細に、交際がどう

だったのか、そうした日々を思い出していただきたい。
N: So I guess, uh...please tell us all the details of whatever happened in those days...
S: Yeah.
N: You know, you...I guess you wanted him to restore his pride as an artist.
S: Yes!
N: And so you tried to give him social rehabilitation, so to speak, taking him to GHQ parties...
S: Yes. He had an army uniform.
N: Oh really?
S: Yeah. When I first met him, Eisenhower jacket. American!
S: Yes!
S: He...he made himself.
M: ファーストタイム。ファーストタイム？
S: Yeah. First time.
N: That the first meeting?
S: He made himself. On the sewing machine.
N: Himself?
S: Yeah!
M: あの人はそう、自分でミシンで縫うんですよ。
N: Wow!
M: 藤田の家に最初に行ったとき、どなたと一緒にだったのですか。お一人だったか、ご同僚と一緒にだったか。向井さんのレターと一緒にだったのはまちがいないですが。そのときの印象、藤田の服装、家の中はどんな様子だったか、間取りは、藤田夫人はどうだったか、細かくお教えください。
N: Again about that part.
M: First inspiration...
S: Yeah. I understood!
N: Okay. So with whom did you go to Otake-cho's Foujita's house? And uh, of course, you took a letter of introduction from Mr. Mukai...¹³
S: Yeah.
N: But did you go with anybody?
S: Yes.
N: Did you go there alone?
S: No. I went with a little man from Toppan. He was a chief of the bindery.
N: Uh-huh.
S: ^[11] And he was a charming little gentleman. Always laughing and carefree.
N: Japanese?
S: Just perfect for Foujita. And he wanted nothing for

13 向井潤吉(1901-1995) 洋画家。弟は彫刻家の向井良吉。
14 庄司喜蔵(1903-1991) 若い頃から庄司浅水の名で書誌学の著作がある。1944年より凸版印刷勤務。戦後、板橋工場製本課長。後に退社し研究者とし

て著述業に専念。著書に「庄司浅水著作集 書誌編」全14巻(出版ニュース社、1979-1983)など。

himself. And he was one of Tokyo's...Japan's...biggest
[3] collector of miniature books. Very strange (聞き取り不能)

N: You don't remember his name?

S: Shoji.¹⁴

N: Shoji.

S: Mr. Shoji.

S: About, uh...

S: About two years ago...um, two years ago, someone told me, they...he gave a picture that I had taken of Foujita in Kyoto. And the newspaper published a picture...of...of...you know, where we had a party. And he was so proud of that time that he wrote a little story how Sherman took photo of him and Foujita and the mayor of Kyoto and everything. And it was in some newspaper.

N: Very recently?

S: So...yeah. About two years ago.

S: But I don't know...

S: So he wrote me letters...of...about ten years ago and said, "I hope we meet again on this earth, but if..."Yeah! "If not, we will meet in heaven."

N: Oh!

S: It was charming.

N: So he must be fairly well now.

S: I don't know. I don't think he's alive.

S: I don't think. Very old. He was much older than me.Yeah.

M: では、藤田の家にお入りください¹⁵。

N: Okay, so now you are in his house...

S: Yeah.

N: So what was it like? You know, that may be floor plan, and uh, how was Mrs...

S: Well, it was a little reception at the door. He held me at the door.

N: Uh-huh.

S: And then Foujita, uh, talked to me. Of course, the good thing was, I was from Toppan.

N: Uh-huh.

S: Because, uh, Foujita had experience of printing, um, different works of his at Toppan. So that was nice. And then Shoji was very diplomatic. And then he presented the letter from Mukai. So it was a lovely presentation. Then he said, "Won't you come in?" So then he brought me into the studio. And he said, "Would you like to see some of my works?" So he

took...oh, stacks of scrolls... gorgeous *kakimono*?

N: *Kakemono*.

S: And he put them out on the floor. And they were mostly of the South American period. And they were gorgeous! And they had that sort of a shadow effect around the figures that...so I said, "Oh! That's the famous Foujita technique! Fine line and shadow." And then he said, "Huh. You understand." And then he...he welcomed me surely because I had...it wasn't just the name, it was his works that I loved.

M: 今、凸版の紹介で迎えにきたというくらいだから、何月何日にいくかは凸版を通じて連絡がいていたのでしょうね。だからわざわざ、こう、マッカーサーアーミーウェア・・・

S: [2]Yeah. And his hair...

N: Eisenhower jacket...jacket.

M: アイゼンハワー。

S: And his hair...pushed...

M: マッカーサーより上か。

S: Yeah. And his hair was pushed over.

N: Oh really!

S: No bangs. When I got him to go to Korinkaku¹⁶, and Prince Chichibu,¹⁷ he combed it down. And made again the bangs. Very interesting!

N: So I guess he was notified by someone from Toppan that you would be visiting him on such and such date.

S: Oh no! No.

N: So how...maybe...he thought maybe that's why he had Eisenhower jacket.

S: Oh no. No. He would...he did this...he had a bomb shelter in his back yard.

N: Uh-huh.

S: And he was very...military feeling. Um, um...now, of course, with Americans here, he thought, "This is appropriate dress." So he would take his trouser and tuck it in. Like we would do with a boot, tuck it into the boot. And he would have this...

N: He had boots on, too?

S: Not boots. No. Shoes.

N: Boots..but into the shoes.

S: But he would tuck the bottom of the trouser like a monpe.

N: Uh-huh.

S: And...and then he would have this jacket of...Eisenhower jacket, and I wanted to laugh!

15 庄司の話題が続いたので、藤田訪問の話に戻ってくださいという意味。

16 光輪閣 高輪の高松宮旧邸。戦後、迎賓館「光輪閣」となって進駐軍高官を接待したりパーティーを催す社交場に転用された時期がある。

17 秩父宮雍仁親王(1902-1953) 大正天皇の第二皇子。

- Because he, like an actor, thinking now the occupation, he has to dress like American military! An artist's idea.
- N: So without knowing you're coming in advance...
- S: Oh, he...he dressed like that all the time.
- S: After war
- S: Yeah. After the War.
- S: Oh also, he was riding a bicycle.
- M: Bicycle.
- S: It would be good for the bicycle, too.
- S: Hair. Yeah. Over.
- S: Ah! Terrible.
- M: 凸版からおいでになったのは藤田にとって受けいれやすかったと伺ったと思うのですが、ここに凸版の会社の歴史のコピーがあります。戦後、印刷能力がなくなり日銀券、紙幣を発行しなくてはならなかった。紙幣のデザインを決める審査員、13人のメンバーの中に藤田が入っていて、記録によると、かなり大蔵省の偉い人、文部省の人、日銀関係の人がいらっしやるのですが、作家では、絵描きでは藤田さん一人¹⁸。これは20年の11月となっています。記録が正しいかわかりませんが。
- S: He made magazine covers at Toppan.
- M: 凸版とかなり密接な仕事をされていたんでしょうね。
- N: So, uh, you mentioned that because it was good thing you had some association...or association with Toppan. He...Mr. Foujita accepted you far better than you expected because of that.
- S: Yeah. Oh yes. Yes, I'm sure.
- N: He said he has a history of Toppan Company, uh, written in this book.
- S: Oh!
- N: According to that, the, I think, Printing Bureau of our Finance Ministry was bombarded.
- S: Money? Yes.
- N: And then so...bombed and I think that the...they lost the capacity for printing. And after the war, they had to issue new bills. And I guess there was some guidance from GHQ...we believe.
- S: Yeah.
- N: And for...for designing of new bills, 13 people were selected and one of the 13 was Mr. Foujita.
- S: Ah!
- N: And he's the only painter if he remembers...
- S: Oh! Isn't that interesting!
- N: Yes.
- S: Oh, that's why...the man who did the etchings, and who made my copper plates here, was a good friend of Foujita. But I didn't know they worked on the money!
- S: These were made at Toppan by Foujita's design and his friend made them at the...at the etching department, the money department.
- N: Mint?
- S: Yeah.
- N: Yeah. I see.
- M: すごいですね。
- N: So the Bureau of, uh, Mint people?
- S: Yeah.
- S: And the chief was my dear friend.
- N: So Mr. Foujita did the etching himself, right?
- S: Uh, no. Foujita did, uh, the drawings.
- S: And then they...uh, the top money etcher followed the line.
- S: Oh, he was a lovely man. He was the same age as Foujita. I loved him. But every time I go to see him, I always...I would make a joke. The doorway was low. So, and all these people facing...art department facing.
- N: Uh-huh.
- S: So I would go up for some work and I have to go in like this.
- N: Uh-huh.
- S: To go through the door!
- N: The door! It was low.
- S: I was supposed to be like a president of the company, but every...go inside the place, I want to go down like a...
- S: Yeah! I'm a young man. I'm trying to be big man! I had to come down...
- N: But you had to...
- S: So that's very interesting story. I didn't know that.
- N: Yeah.
- S: Because we had the money section there. Every...everybody came and asked me, "Can we look the money?" So I had to take them back and show them through. And I'd say, "Now please. Don't get ideas. This money is no good until it's taken to the government and the stamp for the money is printed."
- N: You didn't know that Foujita had any...
- S: I didn't know!
- M: おそらく凸版が紙幣に関わった、お金を刷った時期は

18 「TOPPAN1985 凸版印刷株式会社史」(凸版印刷株式会社、1985年、341頁)に「そのほか画家の杉浦非水、藤田嗣治の13名によって」とあり、実際には絵描きが一人ではなかった。

短いと思います。その他に工場がなかったから。

N: So I think it was quite a short period of time that

Toppan was involved in printing money because...

S: No. It was a long time.

M: ロングタイム?

S: Yeah. A long time. Four or five years.

S: And they keep asking me. GHQ telephoned me. "Hey, Sherman. Sherman." No. UPI newspaper.

S: "Sherman. They're going to change the money? They're going to change the money? Then tell us first. Tell us first."

M: 余談ですが凸版で印刷していたニューズウィーク、昭和23、4年までやっていたんですかね。

N: These things were printed at Toppan. This is Newsweek.

S: Yeah. Uh-huh.

N: So I guess then they were, you know, printing all these up until 1948 or 49?

M: Maybe.

S: Yes. Up until 49? And Kyodo News Service took over, uh, *TIME* magazine.

N: Kyodo?

S: Kyodo then printed *TIME*.

S: And we had a strike at Toppan and I settled the strike for the workers for American publication but I couldn't do for the Japanese publication. So Kyodo News Service called me, "Mr. Sherman, please come down and help us with *Newsweek*.¹⁹" Strike.

N: Negotiator. Ideal.

S: Yeah. Red band here.

S: I said, "No. I'm Toppan man."

S: But we had the gravure machines.

S: Wonderful. From Germany. First ones.

M: ハイデルベルグっていう。

S: Yeah.

N: Heidelberg.

S: Yeah. Beautiful presses.

M: 素晴らしい機械です。いまだに6、7割はハイデルベルグの機械でないと。償却の年数がちがう。

N: So even today, like 60 or 70 percent of the printing machines we use is from Heidelberg.

S: Oh, yeah.

N: Because, you know, it has very good depreciation.

S: Wonderful. Yeah.

M: GHQはよくパーティーをもよおされたと思います。チャーマンさんが藤田を光輪閣のレセプション、藤

田は当時、戦争画の責任問題があつて引きこもっていました。外国の高官には藤田は有名で、チャーマンさんは彼をきらびやかなところに連れていかれ、藤田はチャーマンさんの目の前で藤田らしさをとりもどした。もちろん光輪閣のレセプションだけではないと思います。そのような例は、数々おありになると思いますのでお話いただきたい。

N: So he'd like to hear from you about many parties you took Foujita to, not only Korinkaku party...

S: Oh, yeah.

N: I'm sure you had so many receptions or parties, you know, given by GHQ.

S: Oh, sure. Yeah.

N: Well, Foujita was...sort of stayed away from artists' circle for a long time.

S: Yes.

N: And, uh, when you took him to Korinkaku party, the high officials of foreign countries, and, of course, GHQ high officials, uh, knew about him and recognized him right away.

S: Oh, yes.

N: And because of that, Foujita thought of recovering himself or restored himself.

S: Yes, yes.

N: And so, um, could you tell us other parties?

S: Oh, I'll tell you. Very interesting. Korinkaku was very proper party, you know. But...um, it was one woman who was very beautiful and flirting with him all the time. And I remember, he hit her on the backside and then he...and then I told him, "Oh my God. You shouldn't do that. Did you?"

N: Back is back?

S: "Because it's a Belgian ambassador's wife." He said, "Frank. She was a shop girl before she married him."

N: Shop girl. I see.

S: He knew her.

N: Back means here or there?

S: Yeah. Ah! Backside!

N: Butt?

S: And he...he didn't drink. Foujita never drank. Just to hold a little. But he sat on the floor. In the middle of the party, everybody enjoying themselves, just sat down.

M: Sat down.

S: On the floor!

S: And then Prince Takamatsu²⁰ came up to me,

19 *TIME*の間違いか。

20 高松宮宣仁親王(1905-1987) 大正天皇の第三皇子。

because it was his house...

N: Uh-huh, yes.

S: And he...he said to me...I said, "Do you have a Foujita?" And he said, "Oh, Frank. I only have one Foujita. ^[5]When I was in the hospital sick, uh, Foujita came and gave me this drawing." He said, "Would you like to see it?" So he took me up to his bedroom and showed me his little picture.

N: Prince Takamatsu?

S: Yeah.

N: Oh. He's made a Prince Takamatsu's picture?

S: He gave him a cat picture. A small picture.

N: Oh!

S: When he was in the hospital.

N: I see.

S: To that big stairway!

M: Big stairway

N: Korinkaku is Prince Takamatsu's residence, right?

S: Yes, his mansion.

N: そこで高松宮に藤田の絵をもっているかきいたら、病院にいるときにもらったと。

S: Shinagawa.

N: Was it in bedroom?

M: ベッドルーム?

S: Yep. Kept it.

M: そうすると高松宮をはじめ皇族方とのつきあいというのもシャーマンさんを通じて、当然そうですね。トップクラスの方との交流というのはシャーマンさんを通じて、ということが多かったんでしょうね。

N: So I suppose, um, Foujita-san met many members of Imperial Fam...Royal Family, Imperial Family, uh, or members through you? Many of them? Cause...

S: ^[6]Well, he...he knew them before.

N: Or that the sort of...top class of high society...

S: But...but he always would say to me, "I don't have habit to meet royalty." He had such inferiority complex. So every girl he ever waked with, or married, who always very low-class girls.

N: Oh.

S: He didn't think himself...and his father was a great general! Grading doctor. And he's from great family! Great grandfather. But still, he felt, because he went off to Paris, that time young...that he didn't have support from Japan. And when you read the book I have on Foujita by Ken Yanagisawa²¹, it will teach you his feeling of neglect. Cause when...first

in London, and he wrote back to...he went first to London and wrote back to Japan and his old girlfriend, he asked her for some help. For money or something to help him. But she didn't answer him and she married another person. So from then on, he just felt he had no place in, uh, royal society. He would just be a joke. And so...he got...what...how to put up with life, he became like a circus man, you know.

N: Circus man?

S: Yeah. He...he did costumes for a circus at London on the sewing machine.

N: I see.

S: Made a living.

N: Oh, he did!

S: Yeah. That's where he got his ideas for dressing so...look strange, you know. It wasn't Paris. He already...

N: London.

S: Yeah, London. He made friends with a very rich...uh, English woman. Mrs. Inokuma²² always told me that. I said, "Foujita has such gorgeous taste. Especially in Staffordshire." You know, the Staffordshire...of pottery, porcelain. I said, "He has such excellent taste!" Some of his paintings, he had the two dogs, you know. Staffordshire. I said, "How did a young man know that?" She said...Mrs. Inokuma knew ver...she loved Foujita! She said, "He learned it all from this English madam!"

N: I see.

S: So it wasn't the French who influenced him first. It was the English.

N: I see. あのー。Can I stop you now?

S: Sure. Yeah.

N: 彼は皇族の人たちと会うのは、自分の習慣ではないという言い方をしている。彼は劣等感をもっていたと思う。

M: 皇族に対して?

N: いいえ、女の人に対して。愛情に飢えていたということでの劣等感だったのか。

S: English, um, wealthy ladies.They were bohemian that time. Then...beautiful young Japanese boy...of course! They take him like toys and they teach him.

S: So he never knew love. He never knew love.

S: He, you know...he changed wives so many times, because he couldn't please the woman. I know one

21 柳沢健(1889-1953) 詩人、外交官。『回想の巴里』(1947年)などの著作がある。

22 猪熊文子(1902-1988) 猪熊弦一郎夫人。

wife, I don't say the name, who told me, "I don't know why I married that man."

N: Oh, really?

N: 奥さんの一人が、どうしてあの人と結婚したかわからないと言っていた。

S: He was so hurt. Painful.

M: エコール・ド・パリ時代、歴史的にあらわれている藤田の妻は3人ですが、キキとかフェルナンドとか。

N: Girls? Kiki?

S: Yeah.

N: Uh, that's...well, at least on the record, we know about two or three wives, but, uh, Foujita had some girls like Fernanda...Fernande?

S: Oh, sure. Low class.

N: Kiki? Low class.

S: Low class. All of them. Always.

N: Like barmaid...

S: And then, later in life, when he got old, he makes madonnas.

S: He never could search...and when I was in New York at an auction. Yeah. I was at an auction. And this woman...Jewish lady sat next to me at the auction. And I bid for the Foujita. And she said, "You like Foujita?" I said, "Yes." She said, "Well, I lived at Paris before and I knew him and I bought an album of his children pictures."

S: She said, "Do you want them?" She... "Come to my house." She...beautiful apartment in New York. Very rich lady. And she said, "I want to get rid of these, you can have them cheap." I said, "Why do you say that? They're beautiful!" She said, "This man is a monster! He hates children!"

N: Oh!

S: I said, "Why do you say that?" She said, "Look at the face of the children. That is not a child's face." So I see the first time, I hit me.²³ I said, "Oh my God. It's true!" He doesn't have the beauty of a child in their face. Very seldom, he would be able to catch it. His own childhood and his own experiences with love...couldn't put into a picture. He would always...it was so sad. Everything about him, I had some sad...like something Charlie Chaplin²⁴. He loved Charlie Chaplin. And Charlie Chaplin was...he always say, they²⁵ (聞き取り不能) good friends. In and around the same period. Something...they changed

girls, and they would admire young girl...and...but they...they lost so much in life.

N: ニューヨークのオークションに行ったとき、隣にユダヤ人の女性が座っていて自分が藤田をほしがっているとわかって、うちに来なさい、家に藤田の子どもの絵のアルバムがあるからと見せてくれて、ほしいなら売るわよと。どうしてときいたら、「この人はこどもを嫌っている」と。「どうしてそんなことを」と尋ねると、「この子どもの顔をみてごらんさない。子どもの顔の美がない。」と言っていた。

M: こまっしゃくれた顔をしていますね。藤田の描いたこどもの顔は。

N: The children...Foujita's children have somehow like adult-like faces.

S: Very.

N: Not children-like.

S: Yeah. Very. Like street children...who...paid...that never had love.

S: And then, changed to madonnas! When I come back from Grande Chaumière²⁶, and there's madonnas all around the room!

S: I found him so full of love, but so afraid to show it. But...if he gave it, someone's going to step on it.

S: And his only hope was Japan. The French...

S: Yeah. The French treat him as a joke, sort of.

S: They love that style. Superficial. Superficial. But they...French men always goes back to his wife and children. He might party and do all that, but he goes back to his wife and children. And he's Catholic. Then poor Foujita, wanting that, he thinks, "Oh, I'll become Catholic." You know. But if he had come back to Japan...really...he was so complicated with his married life with that woman who was...I had nothing to say about that, but...it was impossible for him.

S: And his family here. ^[4]Ashihara ²⁷.Over and over! If he had come back when he was sick, we could have saved his life to live a little longer and to die happy instead of in a Switzerland hospital clinic! He could have...and even...when I made my exhibition in New York for Foujita, and...it was so strange, because Japanese Consul came that day and the French Ambassador came. And the two of them, I'm talking, and I have a photograph. And I said, "When are you going to let Foujita's body come back to Japan, so he

23 it hit meの言い間違いか。

24 Charles Chaplin(1889-1977) イギリス出身の映画俳優、監督。

25 はっきり聞きとれない箇所。would beならば仮定法なので、「僕とチャップリンは、(似ているから)きっと友達になれる!」というような意味ではな

いかと宮内愛の指摘。

26 Grande Chaumière 1950年から1年ほどシャーマンがパリで通っていた学校。

27 蘆原英了(1907-1981) 本名敏信。藤田嗣治の甥。

- can have peace?”
- N: So...
- S: And the French man said, “It’s decided today...Kimiyo won. His body will not come back to Japan.”
- N: When was this?
- S: At my exhibition in New York.
- N: I see.
- S: I’ll give you the program, everything, but...and I have the photograph of we talking. It was so strange, because the same day I made this exhibition at New York²⁸, cause I knew you couldn’t do it very well at Japan, and I had people come from South America and all over to see it. Just my little pictures, I’m not a rich man, and I put them up on the French Embassy at New York. They...they loved it and I...
- N: Your own pictures?
- S: Yes.
- N: I see. For the exhibit...
- S: The ones I collected from his early days.
- N: Uh-huh.
- S: Because I didn’t want them lost!
- N: I see.
- S: I brought them back from New York, from Paris...the early period was the valuable ones! So then...I...I made an exhibition with, uh, what’s that department store? Tokyo?
- K: Takashimaya?
- S: Odakyu? Odakyu!
- K: 小田急ですね。
- S: Odakyu. And, um, just so I could get a catalog made. I didn’t want to sell it or anything like that. Because they weren’t mine when they showed them. I...these people took them and said they’re going to put them in a museum and they didn’t do it. Made me mad...very trick in the book! And so finally, I got a catalog of these pictures made. So we know his early days, something of his early days. And Japan could see them.
- M: 藤田が亡くなったのは1969年だと思うのですか²⁹。
- N: He died in 1969?
- S: Yeah. It was, um...it’s Switzerland.
- M: シャーマンさんの展覧会は、ニューヨークのフランス大使館ですか？
- N: You said the Embassy...the French Embassy, right? You gave that, uh...
- S: Yeah. The show.
- M: これはじゃあぜひ。
- N: Can we take a copy of this?
- S: Oh, sure.
- M: 1968年。1月30日だ。²⁹
- N: 1968.
- M: 何点くらい並んだのですか。
- N: How many, uh, you know, works...Foujita’s works did you put out for the show...at the French Embassy?
- S: I have a catalog. I’ll give you...the photographs³⁰.
- S: Yeah. Photographs of them.
- M: このときの反響はいかがでしたか。大使館だから。
- N: So did you get, uh, really big, you know, responses, or reactions?
- S: Yes! But everybody angry for me, because when I heard they...the French is going to keep his body, I closed the exhibition.
- N: I see.
- S: Took them all away.
- S: I was so angry.
- M: シャーマンさんのお心としては、藤田は日本に眠るべしということでしょうか。
- N: So, um...if I understand you correctly, you feel Foujita-san should rest in Japan.
- S: Oh, absolutely!
- S: ^[6]He was lost in Paris! When we go out to dinner, Foujita would take me to best restaurants, because when he walked in, these people would know him. He’d tip them big and they’d say, “Monsieur Foujita!” so all the restaurant hear him, you know, all the people. It made Foujita very happy.
- S: And sit down...then they would do the little things like that to him. And then when we go to party and there’s people waiting outside at some movie star exhibition or something, we’re walking out together, and we hear...when some woman said, “My God!” In French, “Mon Dieu! It’s Foujita. He’s not dead yet!”
- S: That’s all. And then they give him, you know,(聞き取り不能)or some damn, foolish Légion d’ honneur and these old functionaires...government men, you know.
- N: Uh-huh.
- S: They come to see him. He had no association with the world of today, with the young French. It was very sad. ^[7]So he stayed in his damn apartment. Drawing. I have a picture of him at his apartment. Drawing. Drawing. Drawing. And I come in, he’d say, “Oh, Frank. Could you get me some cigarette

28 フランス大使館での展覧会の話。

29 藤田の没年を1969年と言ったことを訂正。1968年1月29日が正しい。

30 註28の展覧会図録のことと推測される。

Gauloises? Can you get me some Gauloises cigarettes?" So, I used to remember, there was one French guy who's very high-classed family, and I told him...I said, "Go out and get for Foujita." And he looked like...he did...brought Foujita his cigarettes. Always smoking...and just drawing, drawing. No more painting. No more expression of life.

N: I see.

S: Making for Japan! Because now he felt he was success! And they were the merchants! And I knew them all. How they would say...they smuggle in Japan. I know one girl, she was on TV. And very famous girl, and she would go over to meet Foujita and she would take the canvas and put them into clothes. She was clothes designer.

N: Uh-huh.

S: And she would put them in among the clothes...and carry them in, and then sell them on black market.

N: Here?

S: Yes.

N: I see.

S: Then the word went out. "Oh, Foujita is so expensive!" And then Foujita say, "They...they love me!" And...before, he'd always tell me, ^[10]"Frank. Don't bring any of my paintings to Japan."

N: I see.

S: And I had to work quietly to get some picture on the market or auction. And I went to Switzerland and bought that *Five Nude*³¹ that, uh, you know, national museum. I got it from there and brought it over here. But I sent a photo to him and I said, "I brought your best painting to Japan." And he said, "Thank you."

N: Via Switzerland. You did that.

S: Yeah.

S: These people buying Gauguin...and where were they when me, with a little salary money, searching out for something of Foujita? Where were they?

S: He...we're the only one who's searching for true Foujita! Then when I brought, everybody so happy to so...only Wakita³² saw the big painting. He said, "Oh, Frank. I saw that in Berlin." There was an exhibition in Berlin back in 1927 or something. But they didn't say, "Wonderful, you brought back to Japan!"³³

S: But I thank you for listening to it...to show the real man. Beautiful man.

M: 藤田の光と影が出てきましたね。藤田の父親は有名で

軍医総監にまでなった人です。藤田は、美術学校を出て結婚しますが、彼女をおいてフランスへ渡ってしまいます。

M: Thank you very much.

M: 女性に対してコンプレックスというのは如実に出ていますね。士官学校に行って軍人になる、家柄のいいお嬢さん进行というルート、そこから脱落する。絵描きというと当時は乞食と言われた時代に自分からその道を選ぶ。

N: So Mr. Miyoshi is quite happy though, you know, somehow you endorse his old...Foujita's background by your statement.

S: Oh. Yeah.

N: I think the family prepared the marriage for him...you know, the first marriage³⁴.

S: Yeah.

N: And then, you know, that gave him that...the girl from high society, but he didn't even touch her and then he just left for Europe. All these things...

S: And then he thought she would support him or give him some help. But she felt the other way...that he left her.

S: He was very poor.

N: Huh?

S: Very poor man. Very poor.

M: 寂しい人ですね。

S: But he painted his best.

M: 確認しておかなくてはならないのは、人格が焦点ではなく、芸術を知るスパイスとして、第一は藤田の崇高な芸術についてということです。

N: Well, of course, all these stories, you know, we see his light and shadow, the bright side and dark side, but...

S: Yeah.

N: That's not what the...we're actually focusing upon.

S: No.

N: We would like to really look...focus upon his supreme or sublime artisticity or artistic, uh, talents or whatever...

S: Yes. Very unique.

N: Unique.

S: Unique! It was Foujita. It was like magic.

M: マジック。日の当たるところを。

N: So, shall we talk about the light...light side, or the sunny side of Mr. Foujita?

S: Oh, yes. Well...of course, I wish that I had known

31 藤田嗣治《五人の裸婦》

32 脇田和(1908-2005) 洋画家。1920年代ドイツに渡航。戦争中、藤田と同じ神奈川県藤野町に疎開。

33 この聞き取りは誤りの可能性があると言内愛の指摘。

34 実際の二人は恋愛結婚だったが、三好が最初の妻とみのことを親が決めた家柄のよい妻と話しているため中川はそのまま英訳している。

him when he was young.

S: You can see...when he was a fantastic playboy.

M: ファンタスティックプレイボーイ。

S: That was a beautiful part of him. So when I was in Paris, I went to this photo studio. That, uh...they contract for pictures of artists. And I bought up all their pictures of Foujita during that period. So I got all those to show you, you know, with Youki and all the others...that shows how happy he was.

M: サンキュー。

S: Yeah. It shows his famous house that he never paid taxes for.

N: Ah!

S: That he had to leave, just before the war, he had to leave and come back here. It wasn't so much being patriotic.

S: He had trouble.

M: 河村さんからシャーマンさんが撮った当時の写真を見せてもらいました。いつもカメラをかかえて写真をお撮りだったのでしょか。

N: So, Mr. Kawamura showed us...pictures, you know, of Mr. Foujita wi...you took.

S: Oh yeah. Yeah.

N: Were you always carrying camera?

S: Yeah. Cause^[11]I knew...this...very important. And after a while, first, Foujita would, at his house, he would say, "No!" But I took pictures at his house, too. Yeah, I've got some here...I don't know.

3 インタビューからわかる交友関係

今回掲載の内容は、すでに既出の藤田とシャーマンの初めての出会い、高松宮旧邸・光輪閣でのパーティーについての新たなエピソード、フランスでの藤田についての回想などである。

前稿では、藤田への紹介状を依頼するため訪問した向井潤吉が、突然玄関先に現れた進駐軍の姿に恐怖したことを紹介した。本稿掲載部分では、凸版印刷の庄司喜蔵が向井の紹介状を藤田に渡してうまくとりなしたこと、いつもにこやかな好人物だった庄司は、藤田訪問に同行するのに最適な人物だったことを語っている³⁵。シャーマンは、凸版印刷の仲介で藤田を訪問したのはとても良いこ

とだったと話しており、藤田がこの会社と関わりがあり良好な関係だったことを窺わせる。

シャーマンの藤田への丁寧さから、事前に訪問の約束をしていたのでしょうねという三好に対してシャーマンは何もしていなかったと答えた。三好が、藤田はわざわざアイゼンハワージャケットを着て彼らを出迎えたことを指摘すると、それは藤田としてはいつものことだったと話している。これについて、シャーマンはそう認識していても突然の訪問でなかった可能性は高いだろう。矢内みどりは、このときシャーマンが「スコッチウイスキーとチーズ、フジタ好みの煙草を準備、黄色のワゴン車で玄関に着いた」と記述している³⁶。シャーマンの藤田に関する知識は、彼が10代のときに見た母国の雑誌や少なくとも戦前の情報であり、1946年における手土産には凸版印刷社員のアドバイスがあったのではないだろうか。また、シャーマンは、このときの藤田が米軍のアイゼンハワージャケットを着て、ズボンを靴に押し込んで頭をきれいなでつけていたことを、非常に愉快だったと晩年まで鮮やかに記憶に残している³⁷。この藤田訪問については、1977年の『藤田嗣治展』図録にシャーマン自身の言葉で語られている。それによると、シャーマンは、会社の「同僚の一人」から藤田が存命で凸版印刷の近くに住んでいることを聞いた。さらにその同僚は、シャーマンの藤田に対する思いを知ると「藤田に引き合わせようと言い出した」という³⁸。この同僚が誰かは確認できないが、向井が藤田の友人だとシャーマンに話したのは、凸版印刷のvery knowledgeable old gentleman³⁹だった。

庄司については、藤田・シャーマンと一緒に写った写真が数多く残り⁴⁰、1948年のシャーマンと藤田の京都旅行に同行していることから二人と近い存在だったと想定していたが、庄司の自著の中に、それを裏付ける回想が見つかった⁴¹。シャーマンは、庄司のことを「豆本の収集家」(collector of miniature books⁴²)と言っているが、庄司は、若い頃から書誌研究家で、豆本に限らず稀覯本を蒐集し、後に退社して研究に専念した人物である。「戦後まもなく」藤田の依頼で版画用の版木を世話した庄司が、藤田からその板に自画自刻自摺した自画像を贈られたことも書かれており、庄司は、シャーマンが凸版印刷に赴任する1946年以前から藤田と面識があった可能性もある⁴³。また、庄司は藤田が離日する直前、藤田の著作『地を泳ぐ』に猫の肉筆素描を頼んで描いてもらっている⁴⁴。シャーマン・藤田の

35 21頁右段下から4行目【1】 he was a charming little gentleman. Always laughing and carefree. ...Just perfect for Foujita.

36 矢内みどり『藤田嗣治とは誰か 作品と手紙から読み解く、美の闘争史』求龍堂、2015年、86頁。矢内は、インタビューを文章にした「シャーマン聞き書き記録」を典拠にしていると記載しているので、この後のインタビュー内容に出てくると思われる。

37 22頁右段上から15行目【2】Yeah. And his hair...から22頁最後まで。河村は、このときのアイゼンハワージャケットの話は何度もシャーマンから聞いている。

38 「フランク・シャーマン『フジタを語る』」前掲註5、16-17頁。

39 前掲註1 拙稿、第31号、80頁。河村泳静はシャーマンからこの人物が山田三

郎太だと聞いている。

40 前掲註1 拙稿、第31号、16-23頁。

41 庄司浅水「凸版印刷時代」「藤田嗣治画伯のこと」『庄司浅水著作集』第11巻、出版ニュース社、1983年、128-138頁、同「書物と人」「書物よもやま話」出版ニュース社、1986年、198-199頁。

42 22頁左段上から2行目【3】。

43 庄司浅水「藤田画伯の肉筆画入り『腕一本』」「書物の楽園」桃源社、1963年、271頁。庄司は前掲註41「書物よもやま話」198頁で、1948年を「終戦まもなくのこと」と書いているため「戦後まもなく」は必ずしも1945年ではないかもしれない。

44 前掲註43、268-269頁。

二人と親しく交友していた庄司は、藤田離日の際には、新聞社の学芸部記者から藤田の隠家について追求されて辟易したという⁴⁵。また、シャーマンが仕事を終わると庄司をジープに乗せてPXに赴き、「藤田嗣治画伯はじめ、田園調布の猪熊弦一郎、荻須高德、向井潤吉、中村直人、中村琢二、吉岡堅二、佐藤敬、中村研一、三岸節子、野口弥太郎、土門拳、柳澤健、越路吹雪らの宅を訪ねたり、時には凸版の自分の部屋に招き、パーティーを開いたりした」というエピソードも書かれている⁴⁶。これは、朝日らの回想とも共通し、シャーマンがこうして自身のみならず日本人同士の交友も広げていったことを伝える。

1991年2月2日のインタビューの中で語られている京都旅行は、シャーマンにとって非常に思い出深い出来事の一つだが、庄司にとっても特別な体験だった。1948年7月、三人で京都・奈良に旅行したときのことを、庄司は、具体的な人名や場所を知らなかったシャーマンよりも詳細に述べている。三人は、嵐山にあった「凸版印刷の寮（重役や接待用のものだったらしい）」（シャーマンはこれをToppan clubhouse… At Kyoto. And Suminokura was nearbyと言っている⁴⁷）に宿泊し、『たんすや』で知られる初瀬川（二科会員）や「筒井徳治郎などが世話役」をつとめた⁴⁸。シャーマンコレクション中の京都旅行写真（図4）の裏には「沙満運様 筒井」と書かれており、この筒井は筒井徳二郎のことと思われる。彼らは、当時進駐軍に接収されていた嵐山の旧角倉了以邸で堂本印象らと写真を撮り（図5）、豪華な食事を堪能し、「高山京都市長の好意による市長専用の大型乗用車で」奈良の法隆寺を訪問、途中、天理教の中山正善邸に一泊した⁴⁹。庄司は、法隆寺では「藤田嗣治画伯といっしょだったため、だれにも妨げられず、すぐそばに身を寄せ」貴重な仏像を「あかず鑑賞すること」ができ、「進駐軍軍属フランク・シャーマン」と高名な「藤田画伯」の恩恵を十二分に享受した。旅行中の歓待について、藤田が「そのあとにはあらかじめ用意されていた色紙の何枚かに、例のごとく淡彩の絵を描く労苦が待っていた」とも述べており、著名画家だった藤田が代価として絵を描いて贈ることがよくあったことを窺わせる。

『庄司浅水著作集』第13巻には藤田の写真が掲載されている⁵⁰（図6）。この写真はシャーマンのスクラップ帳では

吉田晴風の藤まつりの一連の写真と一緒に貼られており⁵¹（図7）、藤田と柳沢健の服装が同じため、筆者は、これまで1948年5月の藤まつり時の写真と考えていた。しかし庄司の著書のキャプションには「藤田嗣治、著者（庄司）、関沢秀隆、柳沢健氏（昭和23年・箱根環翠楼で）」とある。本文中に写真に関する記述はなく、なぜ掲載されているかは不明だ。1948年12月には藤田と柳沢、岡鹿之助の対談集『巴里の昼と夜』が発行されており、初版奥付では著者は柳沢健、発行は関島秀隆、印刷は凸版印刷株式会社となっている。対談は、柳沢、藤田、岡が中心だったが何度か関島も加わっている。柳沢は、前年9月下旬から年始めまで対談をして夏に整理をした⁵²と書いているので、4人の集合写真は、この本に関連するものかもしれない。そしてこのときの写真がシャーマンコレクションに複数枚あるということは、シャーマンがこの場において写真の撮影者だったことを意味するだろう。

庄司はシャーマンの帰国後、彼とは疎遠になっていたが、「ひょんなことから最近になって彼の消息が判明し、ふたたび文通がおこなわれるようになり、1977年1月の藤田展会場で再会を果たしている⁵³。シャーマンは、日米韓を行き来する生涯を送ったため、晩年は、一部を除いて多くの日本人と連絡がとれていた。その中で、アメリカを拠点とした岡田謙三、猪熊弦一郎、脇田和夫妻らとの交友は続き、藤田の甥の蘆原英了とは藤田の死後も親交があった⁵⁴。

シャーマンは、前稿でも話題に出た光輪閣のパーティーで、高松宮が入院中に藤田から絵を贈られた話を聞いている⁵⁵。林洋子は『藤田嗣治 作品をひらく』で、皇族関係の訪欧や留学が続いた1920年代に藤田が「パリですでに顔見知りとなっていた宮家もあったことだろう⁵⁶と述べ、また、藤田の甥である藤田嗣隆も1920年代のフランスで皇族と藤田は交友があっただろうと示唆している⁵⁷。2022年に『東京藝術大学所蔵藤田資料による 藤田嗣治 日々の記録』が公開され、その具体的な内容が明らかになってきた。日記によれば、藤田は1930年に訪仏した高松宮をルーヴル美術館へ案内し、1948年12月に、高松宮に扇子二本をかいて届けている⁵⁸。藤田の日記とシャーマンのインタビューから、藤田はパリ時代から高松宮と知己であり、入院中の宮を見舞って絵を贈り、出国間際のあ

45 前掲註41『庄司浅水著作集』第11巻、136頁。

46 前掲註41『庄司浅水著作集』第11巻、129頁。

47 前掲註1 拙稿、第31号、69頁。

48 初瀬川は初瀬川松太郎、筒井徳二郎（本名徳治郎）は、1930年に海外公演し藤田に会っている俳優で、戦後は京都に居住した。

49 中山正善については、シャーマンコレクションに写真（V-B-4-1344）が残っているが、接点を確認できず、なぜ写真があるのか不明だった。富田芳和「なぜ日本はフジタを捨てたのか？」（静人舎、2018年）150頁で、「天理教教祖・中山正善」を凸版印刷のシャーマン・ルームの常連としているが、同書は、シャーマンが凸版印刷を離れた後にはじめて知り合った人物の名が何人も「常連」として掲載されている。

50 庄司浅水「最近の装丁について」『庄司浅水著作集』第13巻、出版ニュース社、1981年、99頁。

51 吉田晴風の藤祭り詳細は、前掲註1 拙稿、第30号、8頁参照。

52 柳沢健「前書」『巴里の昼と夜』世界の日本社、1948年、3頁。

53 前掲註41『庄司浅水著作集』第11巻、137-138頁「1978年1月」に小田急百貨店の「藤田嗣治画展」とあるが展覧会は1977年1月。

54 26頁右段下から10行目【4】Ashihara. Over and over! "If he had come back when he was sick, we could have saved his life to live a little longer and to die happy instead of in a Switzerland hospital clinic!" 他にも何度か蘆原の名前が出てくる。

55 25頁左段上から5行目【5】"When I was in the hospital sick, uh, Foujita came and gave me this drawing."

56 林洋子「藤田嗣治 作品をひらく」名古屋大学出版会、2008年、345頁

57 2022年4月4日、電話取材。

58 1930年6月3日「高松宮御迎、ルーヴル案内」（21頁）、1948年12月14日「高松宮扇子二本かく」、12月16日「宮様へ扇子二本届けて貰い」（74頁）、『東京藝術大学所蔵藤田資料による 藤田嗣治 日々の記録』東京藝術大学大学美術館、2022年。

わたしい時期にわざわざ扇子を届けたことが伝わる。こうしたことは1991年時点には広く知られる事実ではなかったため、三好は、藤田の光輪閣パーティー参加や秩父宮夫妻訪問のような上流階級との交際を、進駐軍であるシャーマンの尽力によるものだという前提で質問し、シャーマンは、藤田はもともと上流階級の出身であり、以前から彼らを知っていたと話している⁵⁹。またシャーマンは、自分が耳にする藤田の交友から藤田家が皇族とつながりがあると思っていたようだ⁶⁰(図8)。

シャーマンと藤田の交友がいつまで続いたのか正確なところは不明だが、これまでのインタビュー内容より1946年から1951年には非常に親しくしていたことはまちがいない。「藤田はいつもアパートでドローイングをしていた」⁶¹というエピソードに関しては、シャーマンが1950年から1年ほどフランス滞在していたことである。レストランでの話が同じ時期だったかは明言していないが、その可能性は高い⁶²。

シャーマンが藤田作品をコレクションし始めたのがいつからかも現時点では明確でないが、オークションでわからないままに手を上げ続けたこともあったという⁶³。これまでに掲載したシャーマンの回想をつなげる限り、1951年にフランスを離れて以降、シャーマンと藤田が直接会って話す機会はあまりなかったと思われるが、1960年代まで連絡はとりあっていた⁶⁴。1963年、シャーマンは、スイスの美術商バイエラーを通じて《五人の裸婦》を購入し、日本に運んでいる⁶⁵。藤田は自分の絵を日本におきたくないと言いつつ、シャーマンが入手した《五人の裸婦》が日本にあることを知ると、感謝の言葉を伝えている⁶⁶。

シャーマンコレクションの特色の一つは膨大な写真である。シャーマンは、藤田は最初いやがっていたが、重要なことだからとにかく写真を撮ったと話しており、写真を残すことの意義を考え意識的に撮影していた⁶⁷。シャーマンは藤田以外にも非常に多くの人々の写真を撮り、今日、それらは、戦後日本の文化人の交友を伝える貴重な記録となっている。

4 おわりに

2018年のシャーマンコレクション展の後、当時の北海道立近代美術館の学芸副館長(現・札幌芸術の森美術館長)佐藤幸宏氏から、インタビュー音声のデータ化を勧め

られ、鹿島美術財団の美術に関する調査研究助成(2019年度)を受けて文字起こしを実施した。当初、それは河村泳静氏に渡して終了する予定だったが、その膨大な量と内容確認の必要性から、本稿につながった。

これまでのインタビューから、シャーマンが藤田の初期・戦前のパリ時代の作品を評価し、再渡仏後の藤田の人生と作品には批判的なことが伝わるが、その根拠は、1950年からおよそ1年、パリに滞在し、毎日のように藤田と接した時期の印象であることがわかってきた。逆に言えば、1968年までの藤田の20年近いフランスでの人生と制作についてはあまり理解していないように見受けられるが、シャーマンの会話では年代確認ができないことが多いため、それについては今後のインタビュー内容や藤田の日記、他作家の資料と照合することで精査されていくものと考えられる。

謝辞

シャーマンの遺志を継いだ河村泳静氏は、河村アートプロジェクトと銘打って、シャーマンの死後30年以上、その顕彰に力を注いでいます。また、当時、回顧録の編集を担当していた「美術の図書 三好企画」の三好寛佳、由美子夫妻、通訳を務めた中川佳子氏、30年前のプロジェクトに関わった方々のご厚意によって、本稿の執筆が可能になっていることを改めて感謝申し上げます。

本稿の執筆にあたって佐藤幸宏氏にご助言いただきました。また、インタビューの文字起こしを実施した宮内愛氏には、その後何年にもわたって確認作業にご協力いただいています。一柳友子氏、今井敬子氏(ポーラ美術館)、佐川夕子氏(目黒区美術館)、都築千重子氏(東京国立近代美術館)、長門季氏(神奈川県立近代美術館)、長谷川徳七氏、濱淵真弓氏(岩手県立美術館)、山極佳子氏(上田市立美術館)、伊達市教育委員会より情報提供をいただきました。本稿は、2019年度鹿島美術財団美術に関する調査研究助成を受けた成果の一部として執筆しています。

シャーマンの遺族について何か情報がございましたらご教示いただければ幸いです。

59 25頁左段下から14行目【6】 he...he knew them before.

60 図8の写真の裏には“Every art student knows him Famous Parisian Artist Comes from one of Japans oldest families-Friend of Emperor”と書かれている。嗣治の父が陸軍軍医総監、兄嗣雄の妻が児玉源太郎子爵の娘、その妹の児玉ツルが木戸幸一侯爵に嫁いでおり藤田家は名家と言えるが、シャーマンの認識はそれ以上だったようだ。

61 27頁右段下から4行目【7】 So he stayed in his damn apartment. Drawing. I have a picture of him at his apartment. Drawing. Drawing. Drawing.

62 27頁右段上から25行目【8】 He was lost in Paris! When we go out to dinner, Foujita would take me to best restaurants, because when he walked in, these people would know him. He'd tip them big and they'd say, "Monsieur Foujita!" so all the restaurant hear him, you know, all the people. It made Foujita very happy.

63 21頁左段上から16行目【9】 So I kept my hand up all the time.

64 前掲註58 1956年12月4日「sherman□□□に出した私の絵はがきの写真複製い沢山送って来て面白かった」(139頁)、1958年6月20日「Sherman写真岡田謙三二人 英了二人 沢田等」(159頁)とある。

65 前掲註7「1.《五人の裸婦》の来歴と過去の修復—今回のプロジェクトの経緯」、59-60頁。

66 28頁左段上から24行目【10】 “Frank. Don't bring any of my paintings to Japan.”31行目“I brought your best painting to Japan.” And he said, “Thank you.”

67 29頁左段上から25行目【11】 I knew...this...very important. And after a while, first, Foujita would, at his house, he would say, “No!” But I took pictures at his house, too.



図 1



図 2



図 3



図 4-1

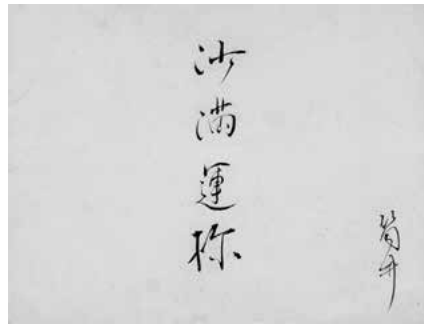


図 4-2



図 5



図 6



図 7



図 8-1

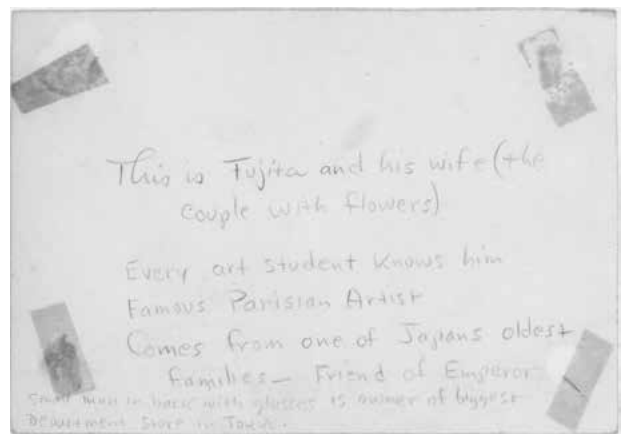


図 8-2

- 図1 河村泳静とシャーマンコレクションを積載したトラック
- 図2 V-B-4-0352 左上段:松本竣介《青の風景》岩手県立美術館蔵、中段:松本竣介《橋(東京駅裏)》神奈川県立近代美術館蔵、下段:飯田(凸版印刷時代のシャーマンの同僚)、右上段:松本禎子と朝日晷、下段:松本禎子 人物写真はすべて神奈川県立近代美術館にて 1958年
- 図3 V-B-4-0925 松本禎子 神奈川県立近代美術館にて 1958年
- 図4-1 V-B-4-0068 左から庄司喜蔵、藤田嗣治、澤村貞子、シャーマン、澤村国太郎、筒井徳治郎 京都にて 1948年
- 図4-2 裏面 右下に筒井
- 図5 V-B-4-1148 左端:庄司喜蔵、右端:堂本印象、一人おいて藤田嗣治 京都角倉邸にて 1948年
- 図6 V-B-4-0045 左から藤田嗣治、庄司喜蔵、関沢秀隆、柳沢健 箱根環翠楼にて 1948年
*『庄司浅水著作集 書誌編』第13巻(出版ニュース社、1981年)90頁に同じ写真が掲載。キャプションは同書に準じた。
- 図7 V-B-4-1326 シャーマンのスクラップ帳 左中段2枚が図6と同じ場所の写真
- 図8-1 V-B-4-0284 前列右から中村直人、シャーマン、藤田君代、藤田嗣治
*上田市立美術館の中村直人資料には同じ写真に1948年とある。
- 図8-2 裏面

V-B-4は、伊達市教育委員会が付したコレクション整理番号。

執筆者(五十音順)

佐藤由美加(北海道立文学館)

田村 允英(北海道立函館美術館)

北海道立美術館・芸術館紀要 第33号 2024

Hokkaido Art Museum Studies No.33

ISSN 2759-1891

編集・発行

北海道立近代美術館

北海道立旭川美術館

北海道立函館美術館

北海道立帯広美術館

北海道立釧路芸術館

北海道立三岸好太郎美術館

2024年3月発行

印刷・デザイン: 中西印刷株式会社